
インフィニット・ストラトス EX

西郷美郷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス EX

【Nコード】

N1116V

【作者名】

西郷美郷

【あらすじ】

女性にしか反応しない兵器ISの操縦者を育成するための学校、IS学園。

そこで「世界で唯一ISを使える男」織斑一夏は日々個性的な女の子達に振り回されながらも充実な学園生活を送っていた。そんなIS学園に新たな転校生が転入してきた。その転校生はなんと【男】だった！二人目の男子に浮き足立つ女の子達。しかし女の子達からの「男で二人目のIS操縦者だね」と言う問いに彼はこう答える。

「ISを動かせるのは女の子だけだよ」

『西郷美郷』が送る二次創作 第二弾 開戦！！

二人目の男

「転校生？ この時期に？」

俺は、またかよ！　なんてことを思いながら鈴に聞き返した。

「そうなのよ。今度はうちのクラスにくることになったんだけど、その転校生はなんか男らしいのよ」

「男？」

鈴から男と聞かされこのパターンはいつぞやのヤツかと俺はチラリ
と思い当たる節がある人物に目を向ける。

「何かな？　一夏」

目線の先にはシャルがニコリと笑顔を見せつつも青白い炎が背後に
燃えているようだった。

「な、なんでもない」

いかん、悟られた。

「ふうー。一夏さんはこういう所でデリカシーに欠けますわね」

「全くだ。乙女の純情を何だと思っている」

「嫁のこういふだらしない所は分かっているつもりでも、慣れんも
のだ」

手厳しい言葉をセシリア、箒、ラウラと投げつけられ早くもHPが
0になりそうだ。

「あんたが考えていることは分かるけど、今回はその可能性はない

わ
」

「なんでそう断言できるんだよ」

「身体検査があつたからよ」

ああ、なるほどと俺は頷く。シャルの件もあるし審査も更に厳しくなつたんだろうな。

「でもまあ、」

教室の外を見ながら俺はフと思う。

一体どんな奴なんだろうな。

「はい、今日は転校生が来たらしいので紹介するー。入れー」

（相変わらずやる気が見えないわねーうちの担任）

鈴はそんなことを思いつつ転校生が入ってくる扉に目をやる。

ガラガラと扉を開く音と共に一人の男子が入ってくる。一夏と一期シャルロットが着ていた男子用の制服を着て。

「初めまして。轡虫^{くつむじ} 優希^{ゆうき}です。よろしく願いします」

ザワッ！

軽いどよめきが起きた。

このどよめきは、名前からして日本人にも関わらず髪型は金髪に所

々赤いメッシュが入っており外人的な容姿にも関わらず目の色は日本人に多く見られるブラウン色になっている辺りがかかるうじて日本人であることを思わせている。そして男にも関わらず顔つき体つきが限りなく女性に近いため誰もが「本当に男？」というどよめきだった。

「あれ？　もしかして男と思われてない？」そんな視線を感じたのか優希は心外だなという面もちで頬を掻いた。

「見た目は女の子っぽいけど正真正銘の男ですよ、証拠にホラ」
言うが先か、いきなり上着を脱ぐと優希は上半身の肌を露わにして見せてきた。

きやあーっ！　と、女子はどこことなく嬉しい声の混ざった悲鳴を上げ手で目を隠すが、その手にはちゃっかり隙間が出来ておりバツチリと優希の裸体を見ていた。
そしてその裸体にはどんなに小さい胸でも女性ならある胸の膨らみはなかった。

「これで信じて貰えましたか？」
優希は恥ずかしがる様子もなくニコリとクラスの女子に微笑みかけた。

この日、この大胆さもあってか早くも彼にファンクラブが出来たという。

「それで間違いなく男だって証明できたわけだ」俺は鯖煮込み定食

に箸をいれながら鈴に話しかけた。

今俺と鈴、箒、シャル、ラウラ、セシリアと、いつものメンツで昼食を食べている。

「そつ。ほんとビックリしたわよ、まさか教室でストリップ披露されるなんておもいもしなかったし」

その時のシーンを思い出したのか鈴の頬が少し朱くなっている、よほどインパクトがあつたようだ。

「ふん。男が教室で裸体をさらけ出すなど破廉恥にもほどがある！」
怒気を露わにしたのは箒ですが武士の娘、風紀に厳しい。

俺はまあまあとためながらご飯を口に放り込んだ。

その時

「やあ、君が男性で唯一ISが操縦できる子かい？」

突然話し掛けられ振り向くと、金髪に赤メッシュが特徴的な男子（？）が後ろに立っていた。

男子（？）と思ってしまったのは鈴に聞かされてた通り、限りなく女性に近い容姿をしていたからだ。

「オレは轡虫 優希だよろしく、織斑、……………【ひと】夏くん」
全力で名前を間違われた。

「一夏^{いちか}だ！ ……織斑いちか」

「え？ ああ、ごめんごめん。漢字は苦手だね。隣にいるのが確か同じクラスに居たね。えゝと、ランランだったけ？」

「鳳 鈴音よー！ ……なによランランて！ ……せめてリンリンにしないでよー！！」

酷い間違え方に逆上する鈴に優希は俺と同じような理屈を言い訳に誤っていた。

「今度は大丈夫、君から順にラウラさん、シャルロットさん、セシリアさん。で最後君が、」
優希は最後に箒を指差して

「篠ノ乃【の】さん」と間違えた。

「篠ノ乃だ!!」

「あ、あれ？」

（こいつ、もしかして漢字が苦手なんじゃなくて日本語がだめなんじゃないのか。）そんなことを思いながら鯖煮込みを口に放り込んだ。

今日も変わらず食堂の飯はうまかった。

授業も終わり、生徒会の仕事&楯無さんのしごきも終え、疲れた体を休めるべく俺は自分の部屋へと戻っていた。ドアノブを回し疲れたーの言葉を出そうとした時だった。

「おっ？」

「あれ？」

そこには上半身裸の今日転向してきた轡虫 優希がいた。

「す、すまん!!」

俺はとつさに条件反射で背中を向く。

「なんだよ、何謝ってんだよ。男同士なんだから照れることないだろ」

言われてみればと振り替えろうとしたが、優希の白い肌が目に入るとつい再度背中を向けてしまう。

（こいつなんであんな肌がきれいなんだ？ 男だと言われても見きたものじゃないぞ!）

「おいおい頼むよ、これから一緒に暮らしていくルームメイトなのに今からそんなんじゃ先が思いやられるぜ」

「いや、分かつてはいるんだが、……………て、ルームメイト？」

俺は思わず聞き返してしまった。ルームメイトで優希はここで暮らすのか？

再度振り向いて優希をみつめる。

「……………だーーーー!! やっぱ無理!!」

だがしかしやっぱり失敗した。だからなんでアイツあんな肌綺麗なんだよ、確かに胸の膨らみもないし若干胸板もあったけど、あったけど! だけでも、だけど、だがしかし!

「なに悶々としてるんだよ、いい加減こっちむけよ?」

「分かってる、分かっただけだよ。責めて上着をきてくれ!」

「なんでだよ、男同士なんだから遠慮するなよ」

「た、頼むから」

俺はかすれるような声で優希に頼む。

「わかったよ。仕方ない」

後ろから服を取り出す音がガサゴソと聞こえてくる。そして急にピタリと音が止まると。

「あのさ、【ひと】夏」

「い、一夏な。なんだ？」

「上着ないからシャツでもいいか？」

「なんでもいいから早く着てくれ！！」

シャツを羽織った優希は今俺と対面式に自分のベッドに座っているのだが、

（うーんシャルの時は中性的で男と言われればなんともなかったけど、優希はどっちかって言うとなりの顔立ち体つきだから参るんだよな）

「どうした？ 【ひと】夏。難しい顔をして」

「一夏な」

俺は多少の名前間違いを諦めつつ優希にいろいろと質問してみることにした。

「優希ってIS学園に入学したってことはISを動かせるってことだよな？」

「いかにもそうだね」

「やっぱり専用機なんか持ってたりするのかな？」

「まあね」

「てことはこれでISを動かせる男子が世界で二人になったわけだ、もしかしたらこれからどんどん男の操縦者が増えていくかもしれないな？」

「何いつてんだ。ISを動かせるのは女だけだよ」

.....は？

「え？　だってお前男だろ？」

「そうだ」

「俺は男だよな？」

「オレにもそう見えるよ」

「.....」

「.....」

（優希は一体何が言いたいんだ？）

改めて俺は、優希はおかしな奴だなと思った。

「まあいつか、もう寝ようぜ」

あれコレ考えてもしょうがないので俺は優希に寝ることを提案した。

「ん。もうか？ いいけどさ」

優希は少し考えてから頷くとゆっくりと俺の布団へと入って来た。

ん？ まて、……………俺の布団！？

「だー！ なに人の布団に入って来てるんだよ、自分の布団で寝ろよ！ー！」

「なんだ嫌なのか？」

「当たり前だ！ 男同士なんて嫌に決まってるだろ」

「そんな些細なこと気にするな、オレは女じみた顔をしているから傍目から見てもなんにもおかしいことは無い」

（自覚あるのかよコイツ）

それはそれで余計に質が悪い。

「とにかく自分の布団で寝ろ！」

「いけずな奴め」

「なんでだよ！」

こうして俺達の夜のとりはふけていくのだった。

「今日は一組と二組の合同実戦をする」

千冬姉が生徒達の前に立ちそう言った。俺は昨日のドタバタのせいで軽く寝不足気味で、稀に出そうになるあくびを必死でこらえていた。

なにせ昨日はあれから何度も忍び込んでくる優希を阻止するのに必死だったからだ。一度不覚をとってベッドへの侵入を許し、背中に持たれかかる気持ちいい感触に目を覚ますと案の定そこには優希が俺を抱き枕を抱くようにして眠っていた。そんなこんなでただいま俺は寝不足中。

（それにしても男の癖にやけに柔らかかったな、……………て！

俺は何を考えているんだ！）

そんな事を考えていたのが祟ったのか堪えていたあくびをつい漏らしてしまった。

それがいけなかった。

「ほー、織斑。私の授業であくびとは余程退屈だったようだな」
鬼の目に止まってしまった。

「い、いえ、そんなことは！」

「今から射撃に対する回避運動の授業をしようと思っていた所だ。
デユノア」

「は、はい！」

突然呼ばれたシャルは何事かと返事をする。

「あのバカに向けて撃ちまくれ」

「ええ〜！」

シャルは千冬姉の要求に思わず声が裏返る。

「気にする事はない、私が許す」

「で、でも〜」チラリと俺に困った視線を送るシャル。さすがのシャルもこの要求には抵抗があるようだ。ありがとうシャル！このままいけばおとがめは無いだろうと胸をなで下ろしていると。

「うーん、やっぱり【ひと】夏があくびをしたのはオレが夜布団に忍び込んだのがいけなかったのかな？」

「……えっ？」「」

女子全員が一斉に驚きの声を上げた。

「こ、これってBL？　もしかしてBL!？」

「ヤバい、私ちよつとドキドキしてきた！」

「何だろう、これ、私の心が満たされていく」

あちらこちらから勝手な妄想が口に出されグラウンド内がどんどんカオスと化していく。

いや待て、今はそれどころではない。俺は恐る恐るシャルの方へ目を向ける、そこには

「……………」

ガシャン！

この世には恐ろしい笑顔と言言葉があるんだなと自覚されるような笑みを作ったシャルが右腕から六一径アサルトカノン《ガルド》を展開していた。

（確かあれはシャルのISで一番弾のデカイ武器だったはず）
俺の額から冷たい汗が流れる。

「織斑先生、射撃ならわたくしも引けはとりませんわ」
いつの間にかISを展開したセシリアが《スターライトmk?》を構えていた。なんで!?

「許可する」
しないで！

「セシリア、外すなよ？」
ラウラが腕を組ながら余計なことを言ってる。

「フッフ、愚問ですわ」

「でわ。実戦開始」

俺はすぐさまISを展開させてグラウンド内を無様に逃げるのだった。

「ひ、酷い目にあった」

ボロボロの体を引きずるようにクラスメートの列に並ぶ俺に優希がコッソリ話しかけてきた。

「とんだ災難だな」

「誰のせいだよ誰の」

「悪い悪い。でもほんとの事じゃないか」

「そうだけど、結果がコレだぜ？ 頼むよマジで」

「ああ、以後気をつけるよ」

優希の屈託な笑みを見てると責める気も無くなるから不思議だ。悪い奴ではないんだろうけど、自覚はないのだからと内心で呟くしかなかった。

「遠回りをしてしまったが今回は全員専用機持ち以外は打鉄に乗っての実戦訓練及び初めての大多数の団体戦を行う。初めての大人数での団体戦のため統制はとれないだろうが、何事を経験だ。集団戦闘での座学は終了済みだからな、それをもとに戦闘すればいい」
結構無茶苦茶言ってる気がするがここはさすが千冬姉と諦めるしかないんだろうな。

団体戦 【前編】

「あの、お、織斑先生」

「ん、どうした」

この話を聞いた二組の一人の女子が手を挙げて千冬姉に質問をしてきた。

「一組には専用機持ちが5人もいるのでさすがにこれではスペックに差がありすぎるのでわ？」

確かに専用機と量産型のISでは性能に差があるのは確かだ。こっちは5機であつちらは2機、うーん、フェアじゃない。ところがこれに対し以外な人物が否定をした。

「いや、大丈夫なんじゃないかな？ 性能の差は分かるけど、そこまで懸念する要素でもないと思う」
優希だった。

「え？ でもISの性能だけじゃないよ、実戦経験もあつちは豊富だし」

「無人のISに暴走した《福音》^{ふくおん}に手こずっているようじゃ底は知れてるよ」

手厳しい評価をグサリと刺され俺は少したじろいだ。だけど無人のISでもすげー強かつたんだぜ？ ほんと。あと《ふくおん》じゃなくて《ふくいん》な。

「言ってくれな。そこまで言う貴様は余程の腕とISを持っているのだからな」

早くも火花を散らしたのはラウラだった。さすがのラウラもここま
で言われては黙っていない。

「まさか、腕もISも並以下、よくて並。」

「そんな事でよく大見栄をきれるものだ」

「見栄じゃないよ、事実だ」

「……………」

優希はラウラの感情を見事に逆なでした。ラウラを怒らせようとする
なんてとんでもないことをする奴だと少々感心した。俺には無理
だ。

「そこまでしておけ二人共、どっちが正しいかなど戦えば分かる」
さすが千冬姉、バツサリだ。

「それでは実戦訓練の後にクラスマッチ団体戦をやる。まあ団体戦
と言っても打鉄は40機しか借りられなかったのでな、専用機あわ
せて20対20でクラスマッチをやる。選抜メンバーは決めておく
ように」

はい。と全員が声を合わせ返事をする。何はともあれまずは実戦訓
練だ。

「ねーねー。優希くんのISってどんなの!」

「そうそう! 私も気になってたんだよねー」

「なんてったって男でISが動かせる二人目の男子だもんねー」

二組の女子が早くも優希のISに興味を持ち集まっている。その気

持ち分かるなー、俺も気になる。

「男ではISは動かせないよ、動かせるのは女だけだ」

「えー？ 意味わかんないよー」

「だって優希くんも織斑くんも男じゃない」

優希はまたあの意味深発言を繰り返している。一体どういうことなんだ？

「それはね」

優希は胸に手を当て、集中するように目を閉じる。すると優希の体を粒子がまとっていく。

「こう言うことさ」

そこには、黒い鎧を身に纏い。関節部位は銀で装飾されているISが優希に装備されていた。だが、見るべき所はそこではない。金髪に赤いアッシュが特徴だった髪は赤に統一され、細身ではあったが男特有の体の硬さは無くなり、変わりに女性ならではの柔軟なラインがでていた。そしてなによりも決定的だったのが。

「む、胸がある」

優希は女になっていた。

脳内に飛び込んできた衝撃的事実に、つい口に出してしまった。

この言葉に専用機持ち5人組がギロリと俺をにらんだ。に、睨むなよ、事実じゃないか。

優希の体に出現した女の象徴は、箒ほどは無くともセシリアと同じくらいはあった。そして男用のISスーツを着ているせいでへそが出ていて何だかエロい。

「だから言つたろ？ 女じゃなきゃISは乗れないって」
女体化した優希は若干声が高くなっていた。

「こ、こつ言つ事だったのか」
俺は驚愕を露わにするしかなかった。

「……いやだつてそうだろ？ 男が女になつたんだぜ？ なんて漫画だよ。」

「【ひと】夏ー」
ISを身に纏つた優希が話しかけてきた。

「な、なんだよ」
優希は右手で胸を隠すような仕草をする

「あんまり見ないでくれ、中身は男でも、そんなにまじまじと見られると恥ずかしいんだ」

「……な！？」
専用機持ち5人組が一齐に声を上げる。

「あんたつて本当に女となると見境ないわよね」鈴は青筋を立てんばかりの面もちで衝撃砲のチャージを始め。

「クラスマツチより嫁の再教育の方が最優先のようだ」

ラウラは「ドイツの冷水」と呼ばれるにふさわしい冷たい目で俺を見て左肩に装備した大型レールカノンの照準が俺定まる。

「フッフ、ターゲットロック、ですわ」

セシリアのBT兵器がブルーテアアーズのスカートから射出され

「喜べ、この武器を使うのは人間ではお前が初めてだ」

箒はゴーレム？との戦闘で使えるようになった射撃武器《穿千》をお見舞いしてくれるらしい、全然嬉しくはないが。

「大丈夫だよ一夏、シールドエネルギーが切れた所に一発だけ打ち込むだけだから。」シャルは屈託な笑みでアサルトライフルを構えている。一発撃ち込むのにその武器のチョイスは間違っていると思う。

俺は後ずさりながら言い訳を考えるため脳をフル回転させた。

そして思いついた。

「い、今は授業中だぜ、勝手なことしたら千冬ね、じゃない。織斑先生に叱られるって。そ、そうだ！食堂のデザートの一つ奢る。これでどーだ？」

我ながら苦しい言い訳とワイロだと思いつつチラリと箒たちの顔を見る。

すると

ニコニコ

笑顔だった。まるで全てを許してくれるのではないかと思うくらいの笑顔。

「許してくれるのか」

俺はホッと胸をなで下ろしながら箒たちに聞くと。

「……………却下……………」

絶望の答えと共にロックオンされた武器が俺に向けて放たれるのであった。

「……………酷い目にあった」

俺は奇跡的に5人の攻撃を全て回避していた。何度も「これは終わった」と思う攻撃が幾つもあったにも関わらずだ。

一通りの攻撃をかわして、そろそろもう駄目だと思い出し頃に千冬姉が「もうそれくらいにしておいてやれ」と言ってくれやっとながら収集されたのだった。

（できればもっと早めに止めて欲しかった）

「何か言ったか？ 織斑」

「い、いえなにも！」

すげー地獄耳、モンドグロッソ優勝者は耳までいいのか？ そんな事を思いつつクラスの専用機持ちと打鉄の連携練習を繰り返す。だいが様にはなってきたてはいたがラウラは「まだまだ×4甘い」と辛口評価だ。甘いのに辛口、……………訓練に集中しよう。

一方二組では

「あんたのIS、えーと、【アートルムエクエス】だっけ？ この機体、性能が打鉄並なんだけど、よくこんなんであれだけ啖呵を切れたものね」

鈴は頭をもたげながら優希に話し掛ける。

「それはしょうがないさ、ISに乗れるようになるためにワンオフアビリティーを費やしているからね」

「要するに一夏の雪片式型と一緒にすることね。物騒な見てくれの癖に肩透かしすぎるわよ」

「ごめん」

優希は頭を掻きながら申し訳ないように謝る。

「全くどうするのよクラスマッチ、ラウラー人でも手が余るのに、そこに箒、シャルロット、セシリア、あと一夏も！」

「大丈夫だつて」

「どこがよ」

「そうゆうのに勝つために」

優希は笑った。それは絶望的な局面であっても安心してしまつような笑み。

「戦略があるのさ」

クラス内の連携練習を終え、俺達はこの授業のメイン、クラスマッチのためにグラウンド中央で横に整列していた。

「クラスマッチの勝利条件は相手全員のシールドエネルギーを0にさせることだ。言わば全滅させることが勝利条件になる」

千冬姉がルール説明をしている中、俺達（特にラウラ、箒）は両者共に火花を散らしている。

「……………以上だ。何か質問はあるか？」「ありません」

両者の声が揃う。早く戦って相手を黙らせたい、これだけはお互い一緒にいたい。

千冬姉はやれやれといった様子で首を振る。

「指定位置につけ」

千冬姉の指示と同時にグラウンド中央から端へと移動する。

「では、はじめ！」

合図の瞬間、俺とラウラ、箒、シャルの4人はイグニッション・ブリストで敵陣営に特攻をかけた。

これは一見考え無しに突っ込んでいるように思えるが実は意味がある。お互い初めての団体戦闘のため少なからず最初は困惑しているだろう。

そこが狙い目だと俺達は踏んだ。慣れてない内に場を荒らし、荒らしきった所に後方援護に廻っていたセシリアと打鉄組を進軍させ一気に制圧できる。

そうなる、はずだった。

加速している最中に鈴と優希意外が飛翔するのが見えた。なぜ空に逃げたんだろうと思っていると、ラウラがギクリとした表情をする。

「しまった！！ 制空権か！？」

「常石だろ？」

飛ばなかった鈴と優希は遅れてイグニッション・ブーストを使う。意表を突かれた俺達の間を抜くと、後方に待機していたセシリアと打鉄組の群へと突っ込んでいく。

「マズい、戻ろう！ うおっ！？」

戻ろうとする俺達に向け制空権を制した相手の打鉄組が空からアサルトマシンガンを撃って来た。大量の銃弾に身動きがとれない。どうやら俺達を足止めさせるためだけにあの武器をチョイスしたらしい。

悔しいがああの武器は理にかなっている。俺の場合、雪羅のシールドでは実弾は跳ね返せないし、ラウラの停止結界はダメージこそ無いが集中しないと作動しないためどの道足止め状態。シャルはシールドは在るものの、少なからずダメージが蓄積するから完璧じゃない。箒も展開装甲に搭載されたシールドでなんとか防ぐ。結局は相手が弾切れをおこした所を狙うしか方法がない。その間セシリアと打鉄組に粘って貰うしかなかった。

「一夏さん達を足止めしたからと言って私たちを甘く見てもらっては困りますわ！」セシリアは言うや否や《スターライトmk?》を構える。

「今だ！」

「わかってる！」鈴は手にした《双天月芽》を勢いよくセシリアに向けて投擲する。

「くうっ！」

辛うじてかわしたセシリアだったが後ろにいた打鉄組数人に直撃した。

「まだまだー！」

返ってきた双天月芽を手に取ると続いて浮上したあと続けて拡散式衝撃砲を両肩から発射する。

「きゃあー！！！」

降り注ぐ衝撃の雨に打鉄組の女子は悲鳴をあげる。鮮やかな連続攻撃を繰り出す鈴であったが、1人、この攻撃に違和感を得ていた人物がいた。

（……おかしいですわ）

セシリアだった。

セシリアはカウンター気味の強襲を受けながらある異変に気づく。

（攻撃が私に集中していない）

最初の鈴の双天月芽をかわして以降セシリアには攻撃が集中していないのだ。普通に考えると向こうは専用機持ちを一人でも大きく減らしたい筈だ。専用機持ち4人が足止めを喰っている今が絶好の機会にもかかわらずセシリアには攻撃が来ない。

（どういう事ですか？）

そんな風に悩んでいると一つ気になることが出てきた。

（優希さんが……………いませんわ！）
慌てて辺りを見渡しセンサーで調べると

「もらったぁー！」

左後ろ死角から優希が現れた。どさくさに紛れて後方に廻っていたらしい。

優希はセシリアの背中にあるバイパスに手をかざす。すると

「な、何ですか？ 一体何がおきてますの！」セシリアの視界は警告表示でいっぱいになっていた。その警告表示にはこう書いてあった。

【ウィルス】と

セシリアのISからPICと補助動力が無くなりISはただの鉄の塊と化した。加えて武器使用不可、移動不可、稼働停止と最悪な状態となる。

「しばらくそこで大人しくしているんだな」
優希はそれだけ言々と前線へと戻るのだった。

「にしても凄いわねーあの子、今の所全部予定通りじゃない」
鈴は打鉄の群れに拡散式衝撃砲を打ち込みながら優希の戦略に驚いていた。それもそのはず、全て優希の言った通りになっているのだから。

数十分前。

「まずは制空権を取る」

開口一番、優希が言ったのがこれだった。

「ふーん、常套手段ね。でもあっちも同じことを考えているんじゃない？」

鈴は優希の作戦に意見する。

「それはあるけど絶対やってこないよ【^{シェインエ}謝謝】」

「だ、だれが【ありがとう】よ！ いい加減名前覚えなさいよね！
どんだん名前から離れていく優希に怒りを覚えつつ、とりあえず鈴は戦略の話に戻す。

「で、理由は？」

「向こうは制空権よりも、もっと有効な手を使ってくるからさ」

「有効な手？」

「イグニッション・ブーストだよ」

「！」

【瞬時加速】これに鈴はやっと気づいた。

「一気に間合いを詰めて場を荒そうって魂胆ね、確かにいきなりそれをやられるとこっちは混乱するわね、……効果的だわ」

「瞬時加速をしてくるのは十中八九シャル、ラウラ、【ひと】夏、

篠ノ乃【の】の4人だね」相変わらず一夏と篠ノ乃の名前を間違う優希だが、顔は真剣そのものである。

「実戦経験豊富なアイツ等なら適任ね。てことは、残りのセシリアと打鉄組は後方支援で訳ね」

優希はコクリと頷き肯定する。

「でも制空権取るのはいいけど飛んだら飛んだでセシリアに蜂の巣にされるわよ？」

「大丈夫さ、打つ手はある。そのために聞くがリン・ウェイツ」

「リンで止めときなさいよ！ ウェイツーて男じゃない！！……もう、何よ？」

「君はイグニッション・ブーストを使えるか？」

「馬鹿にしないでよ、一夏にできて私にできないわけじゃない。使えるわ、それがなに？」

「【ひと】夏達が瞬時加速を使った後、オレと君で遅れて瞬時加速をしかける」

「読めたわ、逆に奇襲をかけようてことね？」

「そうだ、制空権を取りに行った打鉄組を見て全員が空へ移動したと思い込み上に意識が集中するはずだ、セシリアの反応が遅れるそこを狙う」

「でもいくら不意はつけてもいくら私の龍砲でもセシリアを一撃で倒せないわよ」

「君はセシリアは狙わなくていい、打鉄組のシールドエネルギーを
できるだけ大きく削ってくれ」

「ちよつ、セシリアを優先的に狙わなくてどうするのよ！ 一機で
も大きく専用機を減らさないとだめでしょうが」

鈴のもつともな意見に優希はニヤリと笑う。

「セシリアは俺にまかせる。シールドエネルギーは0にできないが、
ウィルスバイパスに直接流して数分間機能停止に追い込むことは
できる」

「入れるの？ 長距離射撃型のセシリアの懷に」

「やってやるさ、でないと負けちゃうからね」

団体戦 【中盤】

（なんてヒヨツたこと言いながらきっちりやってのけたわねアイツ。）

鈴は優希が成し遂げた偉業に裏無く賞賛する。

「そろそろ離脱する。俺達の打鉄組も専用機組を足止めするのも限界だろうからね」

「わかったわ」

優希からのプライベートチャネルを切ると鈴は急いで打鉄組と合流しに向かうのだった。

（ダメージ自体はそんなに無いけどずっとこのままなのもまずい、早く打開しないと！）

俺は降り注ぐ弾丸の雨に歯噛みしつつ策略を練っていた。

（セシリア達とも合流して加勢してやらないと、……………こうなったら！）

「馬鹿者！ 何をするつもりだ！」

ラウラは停止結界を展開しつつ俺が動こうとするのを制止しようとする。

「セシリア達が危ない、この状況を打破しに行く！」

「待て！ もうすぐ相手の弾が尽きる、焦るな！」

「待てない！」

俺は零落白夜を発動させて、打鉄の群れへと突っ込んでいく。その際に防御から攻撃へと切り替えたため、アサルトマシンガンの弾丸をモロに受けてしまったためシールドエネルギーを大きく削ってしまった。

「やめろ！ 弾丸の雨に突っ込めばさらにシールドエネルギーを削られるぞ！」

「無闇やたらに突っ込むかよ！」

雪片式型のエネルギー刃で出来る限り体を隠しイグニッション・ブーストで一気に打鉄の間合いを詰めた。

「おおおおおー！」

横一線に雪片式型を振る俺は一度で打鉄三体にダメージを与える事ができた。

「きゃあー！！！」

陣を崩されアサルトマシンガンの雨が一瞬止む。その一瞬をラウラ達は逃すはずもなく隙について離脱する。

「無茶をしおつて」

「でも硬直状態は避ける事が出来たよ」

「シャルロットは嫁に甘すぎだ」

「そ、そうかな？」

「篠ノ乃とシャルロットはセシリア達の援護に行ってくれ、私は嫁の加勢に行く！」

「了解」

「わかった」

シャルと箒はラウラの指示に頷くとセシリア達の援護をするため後退しようと後ろを向いた時だった。

「らあああー！ー！！」

「はっ！」

いつの間にか戻ってきていた鈴と優希の飛び蹴りを喰らってしまい壁へと吹っ飛ばされた。

アイツ等、いつの間に！

「よし、次のステップに行こう」

その合図と共に打鉄組はセシリア達の方へと進撃して行った。わずかな打鉄組を残して。

「さて、こっからだ」

優希は優勢であったにも関わらず余裕のない顔で俺達と対立する。

ラウラには優希と打鉄が2機

シャルには鈴と打鉄1機

第には打鉄4機

そして俺にも打鉄4機がマークされた。

「全くもって面倒な小細工をしてくれたものだな貴様は」

ラウラが不快感全開の状態で優希に話しかける。

「作戦名「タツプファー・アングリフ」(勇敢な攻撃)とでも名付けておくよ」

「貴様にドイツ語を使われるとイライラするな」

もはやこの二人の間に売り言葉に買い言葉は当たり前らしい。ギスギス感がこっちまで伝わってくる。

「こっからは小細工無し、真っ正面からぶつからせてもらっ」

「来い 木っ端微塵にしてやる」

ラウラの装備する大型レールカノンが優希に向けて発射される。それが第2ラウンド目のゴングとなった。

(うっう、駄目ですね。全然動きませんわ)

ウィルスを流し込まれ依然硬直を続けるセシリアは歯がゆい気持ちで相手打鉄の攻撃に耐えていた。

ISは篠ノ乃東が造った最高傑作であるためウィルスをかけられらとしても直ぐに耐性がつき動けるようになるのだが、現在のセシリアにはその少しの時間が苦痛で仕方のないことだった。

相手打鉄は近接ブレードを展開し、上空からヒット&アウェイ戦法で挑んできていた。この戦い方がまた理に適っていて、鈴に削られていたシールドエネルギーに上乘せするようにダメージがどんどん

蓄積していくのだった。

（皆さんが一生懸命戦っているのに私だけ役立たずなんて、我慢できませんわ！）

どうにもならない現状と葛藤に身悶えしながらも、戦いは無情にも進んで行くのだった。

「はあっ！」 箒は近接ブレード【空裂】から発する斬撃の刃を繰り出すが、一定の距離を保つ相手には当たる事がなかった。それと同じく【雨月】の突きの斬撃も当たらない。

ならばと機動力でも上な紅椿の性能で接近できたとしても二人がかりで近接ブレードでふさがれ、その間に残り二人のアサルトマシンガンで狙撃され、無駄にシールドエネルギーを消費するといったパターンが定番となっていた。

（くっ。攻めきれない）

箒の攻撃が通るにはまだ足りない。

「まさか織斑ちゃんと戦える日が来るなんて」

「夢見たいだよねー」

「うーん、戦ってる織斑くんやっぱりカッコイイ」

「攻撃するときは、優しく、だよ」

こんな茶々を入れられながら俺は二組の打鉄4機と戦っているのだが、雪片式型の攻撃範囲に全く入って来ないため攻撃ができないでいた。雪羅の能力の一つである射撃武器で攻撃するも、まだ射撃に慣れていない俺には命中させることができない。

（打つ手がない俺、……………まあ、無いこともないんだけどな）俺はこの硬直状態を打破する策が実はあった。でも正直実行するには結構リスクが大きいのでイマイチ乗り気じゃない。

（でもこのまま硬直状態が続いてエネルギー無駄にするよりはいいよな）

右手に持つ雪片式型に力を込め、俺はこの策に賭けることにした。

優希は2機の打鉄と共にラウラに立ち向かっていたが、一年最強のIS乗りは伊達では無く、全く歯が立たないのが現状だった。

「甘い！」

ラウラは打鉄のアサルトライフルの弾丸を停止結界で止めを大型レールカノンで反撃する。

「わ、わわわ?!」

迫り来る弾丸をなんとか避けるが続けてワイヤーブレードが動きを封じに襲い掛かるなど息つく暇もない。ラウラには多勢に無勢は関係ないらしかった。

優希も物理武器のブレードを展開していたが近づくこともままなら

ない。

「でかいこと言う割には全く攻めて来ないな轡虫！」

「でかいことつてなんだ？ そんな事言つた覚えはないな」

「我々に勝つと宣言しているだろ」

「それはでかいこととは言わない、お前達は自分のことを過大評価し過ぎだぞ」

「それが、」

ラウラの大型レールカノンが優希に標準を合わせられる。

「でかい事だと言っている！！」

レールカノンの弾丸が一直線に優希に向けて飛んでくる。

「やばっ！」

急いで回避運動を取ろうとしたときだった。

「うっ、これは」

脚が何かに捕まれたように動かなくなっていた。

「A I C！ いつの間に」

「舐めるなよルーキー」

ラウラの冷酷な声を耳にしつつ弾丸は優希に直撃し爆破した。

はずだった

「……………なに、」

ラウラは目の前の光景に驚愕していた。

弾丸が爆破したのは優希の数メートル前、そして弾丸を止めた物は、優希の左手に握られた、リボルバー式の銃だった。

「危ない危ない、全身を捕らえられていたら確実に負けていた」
結構冷や汗ものだったらしく優希の顔は少し焦りの表情になっていた。

「馬鹿な、レールカノンの弾丸をリボルバー式拳銃如きで止められたと言うのか!？」

「如きとは心外だな、この銃は俺が装備する武器で最強の銃だ。軽く見て貰っちゃ困る」

構えていた銃を続けてラウラに向けるとそのまま引き金を引く。

「しまっ!」

弾丸をAICで止めようとしたが、今優希の足を封じていたことに気づきAICを展開出来ないまま直撃を喰らってしまう。

「ぐうつ」

ど派でな爆煙とダメージを受けるが、直ぐに反撃するために爆煙を払いのけ優希を再度確認しようとするが、その場には優希の姿は無かった。

慌ててハイパーセンサーで探し位置を確認する。

そして発見した。優希はスラスターを前方に向け、後退しながら瞬時加速を行っていた。

（奴め、なぜここで後退を？）

不振な面もちで優希を見ていたラウラは彼が後退しながら向かっている先を見つめ。

「！」

そして悟る。

「まずい！」

ラウラは優希の思惑に気づくと急いでスラスターを点火させ、後を追うのだった。

鈴と対峙するシャルは得意のラピッド・スイッチで応戦していた。

「相変わらず厄介な戦法だわ」

「ごめね、負けてはやれないんだ」

「頼んでないわよ別に！」

鈴は衝撃砲を連射しつつ、ある事を考えていた。

（やっぱりシャルロットは強いわねー、全然隙が無いわ）

アサルトライフルの弾丸を回避した後チラリと優希の方に視線を送る。

（あーあー、防戦一方じゃない。シャルロットの隙は俺が作るなんて言っておいて）双天月芽をバトンのように回しシャルロットに斬り込んでいく。

（セシリアを機能停止に追い込んでいる間に勝負をつけるなんてやつぱり無謀だったのよ）

一つの不安を脳裏によぎらせた時だった。

「考え事なんて鈴らしくないね、もらったよ！」

シャルロットは一気に間合いに飛び込むと連装ショットガンを二つ呼び出し両手に持ち近距離で幾重にも放つ。

「あう！」

一瞬の不意を突かれ慌てて距離を取ろうとするがこの隙をシャルロットが逃すわけも無くお得意のラピッド・スイッチで武器を近接ブレードに切り替え猛追する。

（こ、これ以上はやられるのはヤバいわ）鈴はチャージ時間がかかるとわかりながらも龍砲を放とうとした時だった。

「それを待つてた！」

シャルロットが装備してあるシールドの装甲が外れると、そこからパイルバンカーが表れた。

「シールドピアス！？」

「一気に決める！」

シールドピアスの杭の部分が鈴の腹部へ突き刺そうと構えた時だった。

「シャルロット！」

いきなりラウラからプライベートチャンネルが割り込んできた。

「ら、ラウラ!？」

「今すぐその場から離れろ！」

「?、??」

あと一歩で鈴へチェックメイトできる所をなぜ止めるのか理解できず困惑していると目の前に警告画面が広がる。そこには

『敵機接近中』

「!」

急いで警告する報告へ視線を向けると、そこには背中を向けて瞬時加速してくる優希の姿だった。

団体戦 【終幕】

「し、しまっ！」

優希は近接ブレードの刀身を脇の下から出して寸分の狂いもなくシャルロットに向けて突っ込んで行く。

「あぐっ」

刀身はシャルロットの脇腹をとらえそのまま落下し、地面へと叩きつけられる。

「まだまだー！ これはお返しよー!!」

地面にめり込み硬直するシャルロットに衝撃砲を叩き込む鈴。

「くうっ」

シールドを展開しつつその場を離脱し、飛翔する。

「させないわよ！」

鈴は大型の青竜刀二本が連結してある双天月芽を取り外し、そのうちの一本をシャルロットへ投擲する。

「当たらない！」

一本の青竜刀を難なくかわしてみせたが、青竜刀はフェイクだったらしく本命の衝撃砲に直撃を受ける。

「つう、……しまった」

体制を崩してしまい体がよろける。

「今度はこっちがもらったわよ！」

残り一つの青竜刀を手に持ち、瞬時加速で追跡し、シャルロットに

向けて振り下ろす。

（シールドエネルギーを大幅に削られるけど、仕方ない）
シャルロットは両手をクロスにして精一杯の防御を行う。
致命傷にはなるが、シールドエネルギーが0にならないことを読み
その場のピンチをしのごく。

はずだった。

「更に甘いよシャルロット！」

「え？」

足元から声が聞こえ下を見ると、鈴の青竜刀を持った優希が高速で迫っていた。

「鈴の青竜刀！？ まさかあの時投げた青竜刀は攻撃する為じゃなくこのためだったの！」

もはや今気づいた所で後の祭り、シャルロットは鈴の上段からの攻撃と優希の下段からの攻撃にどうすることもできず攻撃をクロスで受けてしまった。

「うっ！」

シャルロットのシールドエネルギーは0となり、脱落となった。

「迂闊だったよ」

シャルロットは悔しそうに、だが爽やかに負けを認めた。

「窮鼠猫を咬むだ」

優希はそれだけ言うと次の標的へと向かうのだった。

「シャルロットが、……………やられただと」理解しがたい現実を目の前にして認めきれないラウラは呆然としていた。

「すきあり！」

「！」ラウラはハイパーセンサーの警告音で我に帰り後ろを振り向くと衝撃砲の雨が目の前に迫ってきていた。

「くっ！」

とつさにAICで相殺しようとしたが、展開がやや遅れたため、数発直撃を受けてしまう。

「おのれ！」

ワイヤーブレードを3本射出し、鈴を追跡する。

「まずっ」

回避を試みたが急速接近してからの龍砲を放っていたためワイヤーブレードからは逃れられず右腕と左足を絡めとられてしまった。

「攻撃の要はここで排除する！」

手刀ブレードを両手に展開するとワイヤーブレードを一気に引き寄せ攻撃にかかる。

しかし、今回はあと一步の攻撃が届かない。

上空から二発の銃声が響き渡る。

高速で迫る二発の弾丸はラウラの背中に直撃した。

「な、に!？」

ラウラは驚愕する。不意を突かれたからではない、優希の放った弾丸が自分のシールドエネルギーを大幅に削る威力だったからだ。

「な、なんだこの威力は、有り得ない!？」

「言つたろ？ 俺の中で最強の武器だと」そう言つと優希はもう一度引き金を引く。リボルバーが回転しトドメの一発がラウラを捉えた。

「くっ、……不覚」

ラウラは自分の失態に歯噛みしつつ、上空を見つめるのだった。

(まさか、ラウラまでやられるとは)

箒はシャルロットに次いでラウラまでがやられたことに信じられないでいた。だが同時に、優希の腕と戦略は認めざる得ないものとなった。

(やはり、私も全力でいかなければなるまい)

箒は意識を集中させ『絢爛武踏』を発動させようとする。

「それは駄目だって優希くんに言われてるの」

今まで距離をとっていた打鉄組が近接ブレードを展開し、急速接近してきた。

「ここで動くのか!？」

箒は絢爛武踏を発動させるのをやめ、接近戦に対応する。だがここであることに気づいた。

（待て、先ほどより、……………数が増えている！！）

今近接ブレードで接近してくる打鉄は七機。なぜ急に増えたのか考えてみたが必要はなかった。なぜなら増えた三機は鈴と優希に付いていた打鉄だったのだから。

（慣れてきた所に増援とは、流石だ！）

手回しの良さについてい賞賛してしまった筈だがこの増援は彼女にとつては好機でもあった。

「この『雨月』の能力、防げるものなら防いで見せよ！」

近接ブレード『雨月』を一度に突くと無数のレーザーが打鉄の群へと飛んでいく。

「頼むわよ！」

「あいあい」

「わかつてるって」

打鉄組は相づちを打ち合うと二人、二人、三人にわかる。二人の内一人がシールドを展開し、残りの一人を守る。三人の所は二人がシールドを展開し、同じく残りの一人を防衛する。当たる筈だった幾つものレーザーはシールドによってさえぎられてしまった。

（『雨月』の能力を見越されたか、だが長くは持つまい！）

筈は続けて雨月を放とうとしたときだった。シールドに守られていた打鉄三機がシールドから顔を出し、アサルトマシンガンを連射してきたのだ。

「なに！？」

慌てて雨月を放つのを止め、急速回避をとり、なんとかよける事に成功する。

（攻撃と防御が統一されている、ここまで来ると見事としか言えんな）

「見事なものだろ？ 俺達クラスのコンビネーション」

「！」

突然割り込んできた声に驚き左を見ると、そこには鈴の青竜刀の片割れを振り下ろしかかる優希が目の前にいた。

急いで防御に転じようとしたが青竜刀の刃は目前に迫っていて間に合わない。

（やられる！）

そう思った時だった。

ガキンッ

刃が重なる音が頭上に響き、恐る恐る目を空ける。そこには

「よう箒、無事か？」

青竜刀を受け止め、息を切らながらも勇敢に立つ、織斑一夏がそこにいた。

「い、一夏！？」

箒が驚いたように俺の名を呼ぶ。なんだよ助けちゃ悪かったのかよ。

「打鉄4機と戦っていたんじゃないかったのか!？」

「ああ、戦ってたさ。そして倒した」

「な!？」

驚くように俺を見上げる箒、信じられないといった感じた。

「あとついでに箒と戦っていた打鉄も二機程倒しておいたから」
箒を助ける際に密集していた打鉄二機を一太刀で一閃してみたら、
エネルギー残量が少なかったのか一撃でしとめることができた。

「……信じられない」

あ、とうとう口に出した。

「それは置いといてだ、箒」

俺は優希の青竜刀を弾くとそのまま箒と一緒に後退してある頼み事
をする。

「『絢爛武踏』を発動して白式にエネルギー補充してくれ、無茶し
たせいでシールドエネルギーが残り少ない」

俺が思いついた打鉄4機相手に対抗する秘策だが、それはイグニッ
ション・ブーストで距離を詰め、零落白夜で一撃必殺するという玉
砕覚悟の戦法だった。

お陰で攻撃を受けまくってシールドエネルギーは底をつきかけてか
なりヤバい状況だ。箒が無事なことを祈っての一八だった。もし箒
がやられていたら補給できないからな。

「まさかこの短時間で打鉄4機を、更に2機倒されるとは思わなかったよ【ひと】夏」

優希は予想外の結果だったのか本当に驚いているようだった。

「最後の二機はたまたまだったけどな」

「一夏、補給が終わった」

「ありがとう、箒」

俺はシールドエネルギーが半分まで回復したことを確認し、箒に礼を言った。

「あーあー、篠ノ乃【の】のには絢爛武踏は使わせない予定で【ひと】夏にも補給は受けさせない予定だったのにな」

「なら補給しているときを狙えばよかったじゃないか？」

俺の疑問に優希は確かにね、と苦笑しながら話し出した。

「【ひと】夏、実は君が打鉄4機を倒すことは想定してなかったんだよ」

過小評価されてるなー俺。まあ、俺も倒せるとは思ってなかったんだけど。

「それどころか君は更に2機の打鉄を倒した」

「あれは成り行きでうまく行っただけさ」

「それでも凄いさ、先にシャルロットやラウラを倒したのだって君が打鉄を倒せないだろうと踏んでの策だったんだ」

「俺だって6機も倒せるとは思わなかったよ」

「だからその謝罪も含めて絢爛武踏の発動・補給を見逃したんだ」

「律儀と言っか、素直と言っか」

「甘いと言ってくれていいよ。さて、篠ノ乃【の】には絢爛武踏を使われ【ひと】夏は補給を受けて息を吹き返した。こっちはちょっとヤバイ状況だ」

「気をつけろ一夏、あいつは私達の裏をかき続けた奴だ。本当にヤバイ状況ならあんな軽口は言えないはずだ」
箒が真剣な面もちで俺に注意をうながしてくる。

「いやいやホント、絢爛武踏と零落白夜は学園内で一番やかいな能力だからね」
優希はカラカラと笑いながら話す。確かに余裕のない人間の様子とは違う。

「だから、《これが耐えられたら君達の勝ち》だ」
優希のISの浮遊ユニットが突然切れ、地上へ墜ちていく。一体なにがしたいのだろうと地面へ墜ちていく優希を見ていた、

その時だった。

「一夏！ 前だー!!」

箒の慌てた声が聞こえ前を見ると、

イグニッション・ブーストで迫って来る鈴の姿があった。

「ヤバイ！」

急いで回避しようとしたが、青竜刀を胸に突き刺される。もちろん絶対防御で刺さってはいないのだが胸元が圧迫されている感覚はあるのだ。

シールドエネルギーが一撃で半分減ってしまふ。

「まだまだー！ 本命はこれだからね！」 鈴の龍砲の標準が定まり発射される。どうやらチャージ済みだったらしい。

「うあああー！！！」

俺はたった数秒で補給されたばかりのエネルギーを0にされてしまった。

「一夏！！ うぐっ」

箒が俺の名前を呼んだ瞬間、紅椿の背中に爆煙が上がる。

「一途過ぎるのも考えものだよ篠ノ乃【の】」

箒の斜め後ろからリボルバー式銃を構えた優希からの攻撃だったらしい。

「く、こ、この〜」

今回何度目の不意を突かれたか分からない不意を突かれた箒は腕から『穿千』を展開し優希に射撃しようとする。

しかし、その攻撃は優希に放たれることはなかった。

「うあっ！？」

また箒の背中から爆煙と衝撃が走ると画面にシールドエネルギー0が表示された。

「爪が甘かったわね」

背後から龍砲を放った鈴が不適そうに笑っていた。

（あと少し、あと少しですわ）

ウィルスを流し込まれてから身動きが取れなかったセシリアはようやくISに搭載されたワクチンが行き通りあと少しで動けるようになるまでできていた。

（私達のクラスの打鉄は残り三機、相手の打鉄は先ほど一夏さん達を相手にしていた打鉄組を合わせて七機。かなりまずい状況ではありますわね）

不利な状況と分かりながらもセシリアはたいして慌てることもなく冷静に状況分析を行っていた。

なぜなら、まだ勝てる勝機が残っているからだ。

今セシリアのシールドエネルギーは少し削られているだけでエネルギーに問題はない。そしてセシリアの乗るブルーティアーズは対複数向けの機体であるため、多くを相手するのに向いているのだ。なによりも強みであるオールレンジ攻撃が可能なBT兵器があるのだから。

それにいくら鈴と優希の専用機でも一夏達の戦闘で削られたシールドエネルギーはブルーティアーズのビーム兵器を一撃でも受ければ終わりである確信もあった。

（……………3、2、1）

『ウィルス解除』

「行きますわ！」

ウィルス解除の表示と共にセシリアは出力全開で飛翔する。

その時だった。

「……………え？」マヌケな声が珍しくセシリアの口から漏れた。それもそのはず、

「残念だったな、ギリギリアウトだ」

優希のリボルバー式銃がセシリアのこめかみに当てられ、さらに正面でチャージ完了した龍砲を放たんとする鈴が目の前に立ち、極めつけは二組で生き残った打鉄七機がセシリアを囲みアサルトマシンガンの銃口を向けていた。

「あ、うあう」

セシリアは既にチェックメイトされていたことを悟ると、ビーム兵器を解除し両手をあげるのだった。こうして、クラスマツチは二組の勝利で幕を下ろした。

その後話とドタバタ大浴場

「まさか本当に勝っちゃうなんてまだ信じられないよ私」

「それは私もだって、相手は専用機5機いたんだよ、普通勝てないって」

「優希くんの戦略がバシバシ決まってたしね、やっぱり優希くんのおかげかな？」

二組の女子達は一組に勝てたことでやいのやいの騒いでいる。

「いや、君達の高さが勝敗を分けたと言っているよ。打鉄四機で攻めたとはいえ、専用機に互角に渡り合えていたのには頭が下がったよ」

優希の賞賛に女子達は「いやいや」と頭を掻きながら照れる。

「で、でもでも、織斑くんは止められなかったよ、ごめんね」一夏を相手にしていた一人が申し訳ないように優希に話し掛けてきた。

「いや、あれはあれでOKさ。シールドエネルギーを大幅に削られていたから篠ノ乃【のの】の絢爛武踏でエネルギー補充をした際に彼女のシールドエネルギーを半分減らすことができたからね」

ポムっと優しく頭をなでてやると落ち込んでいた女子は顔を真っ赤にしてキヤーキヤーと騒ぎながら女子達の輪に入って行った。

「……………ホント、想定外だったよ」

優希はポツリと、一夏の意外性と、内に秘められているであろう潜在能力に感嘆するのだった。

「.....」

.....」

（い、居づらい）

俺達のクラスはクラスマッチに負けたことで空気がヘドロのように重い。

特にラウラの凹みっぷりが以上だ。さっきから虚空をみるようにして固まっている。

「あ、あれだよな！　優希の作戦にしてやられたって感じだよな！　うん。あそこまで先を見越されたら、その、あれだ！　完敗だよな！」

自分でもワザと大げさにしているのが分かったが、なんとしてもこの暗い雰囲気のを和ませたかった。

「フッフ。そんな気を使わなくてもいいよー夏」とシャルロット。

「ああ、.....完敗だ」

「悔しいですけどね」

続いて箒、セシリアと今回の負けを認めた。なんか意外だ。

「確かに、認めざるを得ないな」

今まで上の空だったラウラまでも優希の実力を認めた。

「ラウラ、お前あいつのこと嫌いじゃなかったのか？」

「フン、大っ嫌いにきまっているだろ。だが奴は私達の弱い部分や隙を徹底的についてきたあげく自軍の長所を完璧に生かしきっていたからな。認めるべき所は認める」おおー、あっさり負けを認め賞賛した。伊達にドイツで隊長をやっていないな。

「要するに、みんな素直に負けを認めているんだな？」
俺の問いに一組全員が頷くのだった。

午後の授業を終え、俺は団体戦で疲れた体を癒すべく大浴場へと向かった。

（今回の授業はきつかったな）

大人数での団体戦はシングルで戦うのと違って体力を使うものだった。なにせ個人だけ無事なら良いと言うわけではないのだ、味方がやられないようにフォローやバックアップ等して助けることで戦いを有利に運ぶことができる。

俺はあの団体戦でそのことを学んだ、あの転校生、優希から。そうこうしている内に大浴場へと着き俺はロッカーで衣服を脱いでタオルを腰にかけ大浴場の中へと入って行った。

（こんな広い風呂場を独り占めなんて、贅沢だよな俺）

そんな事を思うとなんだか嬉しくなってきた俺は先に体を洗い風呂場へと直行する。

（まず湯加減を）

お湯は濁り湯と粹な学園の気遣いに感謝しつつ、お湯へと手を伸ばす。

その時だった、

俺の安息の場が、

地獄と化したのは。

手をつけようとしたお湯がいきなりボコリと泡立ったかと思うと、次の瞬間！ 二つの巨大な水柱が風呂場から立ち上がったのだ。

「うおおあああああ……！！！！！！！！！！？？？」

純100%で驚く俺は恥も外聞も関係なくその場で思いつきり尻餅をついた。

だってさ！ お湯が爆発したんだぜ！？

一瞬の出来事ではあったが爆発したお湯から二人の影を見つけた。

「ぶはー！ なかなかやるわね転校生君、肺活量で私と互角に渡り合うなんて」

「いやいやいや、お姉さんこそ流石ですよ、その大きな胸は伊達や酔狂でついてるわけじゃないんですね」

「あら、お上手ね」

いや、うまくないよ。

じゃない！　なんでこの二人がここにいる？

水柱から出てきて影は、水中眼鏡を掛けた更織楯無さんと轡虫優希だった。

断って行っておくが楯無さんは全裸ではない、ちゃんと体にバスタオルを巻いている。優希はと言うと……………

「お前も巻けよ!!!」

案の定、俺と同じでタオルを腰に巻いているだけだった。

「オレは別にいいだろ？」

「いや、……………そうなんだけど」

いい加減慣れないといけないのは分かっているのだがどうしても慣れることができない。

だが、今はそんな事を言っている場合ではない。そんな事より今は最優先につつこまなければいけない事があるのだ。

「優希が居るのは分かるんですけど、なんで楯無さんまでいるんですか!？」

俺は二人の肌が見えないように背中を見せつつ楯無さんに問いかける。

「えーとね、驚かせるため」

「たったそれだけのために男子の大浴場に来たんですか!？」
呆れて言葉が出ない。

「うふふん。お姉さんの執念はスゴいのよ」
この執念はほかに注ぐものはなかったのだろうか？

「楯無さんは警戒心が無さ過ぎです。年頃の男子がいる浴場に入ってくるなんて!」

「それもそうね」

お、楯無さんには珍しく素直だ。

「じゃあ優希くんISを部分展開して女の子になって」

だああああ！ 前言撤回！！ やっぱりこの人はただで済まさせない！

何で優希がIS展開したら女になること知っているんだ？

「だって学園の長だもの」
と楯無さん

「はい分かりました、……………と言いたい所ですが」
これは優希。

「うん？」

「オレのISは部分展開できないんですよ」

……………え？

「部分展開できないのか？」

俺は不思議な物を見るような目で優希に聞く。

「ああ」

「またなんで？」

「えー、説明しなきゃだめ？」
うわ、面倒くさそう。

「お姉さんも聞きたいなー」

「喜んで」

絵に描いたように現金な奴。優希は軽い咳払いをしたあと部分展開できないことについて話し出した。

「まずISは一人の例外を覗いて女性しか乗れない。これは初期から知られていることはお分かりですね」

「『例外』一夏くんのことね」

「そうです。彼意外の男がISを動かすことは今現在でも不可能なことに変わりはありません」

「でもアナタは乗れてるわ」

「ええ、女になって」

「話が見えないな、だからって部分展開できない理由にはならいはずだ」

「つまり。オレが女になるにはISを100%展開しないといけないと言っことさ」

「あっ」

納得した。

「要するに『ISを乗る』と『女になる』は同義なのさ」

優希は満足そうに説明し終わると再度肩まで湯船に浸かっていく。

「まあ弱点とは言えないけど、完全に訳じゃないんだな」

「そつ、男がISに乗れるようになったただけでも進歩なのさ。……

……あつ」

饒舌に話していた優希は急に思いついたような声を上げた。

何だろ？ 何か分からないけど嫌な予感だ。なんて思った俺の予感を尻目に優希は湯船からあがってきた。心の準備無しに裸体を見せるなよ！

「ここでIS展開して女になったオレを見た【ひと】夏のリアクションが見てみたい」

「なんでさっきの流れでそんなこと思っただよ！」

何をどこでどう間違えばこんな思考に行き着くのか理解に苦しむ。

「わゝ、お姉さん優希くんが、ううん、男の子が女の子になる所初めて見ちゃう」

すいません楯無さん、今は黙っていてももらえますか？

「でわ、ご期待に応えて」

「まっ！」

俺の静止も虚しく優希の体が粒子に包まれ、あつという間に優希のISが展開された。

「フッフ、これで楯無さんが強姦される心配が無くなりましたね」

まるで俺が強姦する気でいたかのような発言をしないで欲しいのだが、やっぱりISを展開した優希は一段と綺麗になって目を奪われてしまう。金髪の赤いアッシュだった髪が赤へと統一されそれでいて綺麗だ。体も女つきのラインになり胸が出て、……

……出て？

この時俺がとる行動は優希がISを展開した時にすぐさま後ろを向くことだった。女となった優希に目を奪われる事ではなく、ましてや疑問に思ったことを再度確認すると言ったそういう行動に走る事では決してなかった。

なぜかって？

それは優希が最初風呂場にいたときの性別は何でしょう？

A・男

なら男の優希は楯無さんのようにバスタオルを体に巻く行為を行うだろうか？

A・否

でわ男であつた優希がタオルで隠していた部分はどこでしょう？

A・下半身のみ

もうお分かりですね。

ちなみに優希のISは黒い鎧を身に纏った装甲をしていると例えたが、胸の部分は左と右三本の牙のように開いている。

つまり、胸が全開な訳で。

「あは♪ 一夏くんのエッチー」

「は！」

楯無さんの言葉に我に返り俺は慌てて後ろに振り返るのだった。

「優希くん、胸が丸見えよ」

「あれ？ ああ、忘れてた。上は隠してなかったんだった」

後ろではたわいのない会話のように話しているが、俺の胸はドキドキし過ぎて破裂しそうだ。それにしても

「綺麗なピンク色ね」

「えっ！ いやっ、決してそんなやましいことは考えてません！！」

「「え？」」

しまったー！！！！！！

つい心に思ったことを詠まれたと勘違いして弁解してしまった。俺はどうにかこの場を抑えようと考えたがパニックになった頭では何も思いつかない。そうこうしている内に楯無さんが

「一夏くん」

「は、はい」

「エッチ♪」

「はい」

俺はガツクリうなだれるしかなかった。

浴場の話しはここで終われば良かったのだがそうは問屋がなんとやらで。

「【ひと】夏」

「ん、」

あまりの気軽さにうなだれた頭を上げた俺は優希がまだ上半身裸の優希のことを忘れていて、しまったと舌打ちしたが優希はちゃんと胸を隠してしてくれた。

（ほっ）

としたのもつかの間、優希は何を思ったか

「サービス」

と言って楯無さんのバスタオルを剥ぎ取ったのだった。

.....

箒にも劣らない胸の大きさもさることながら大きいにも関わらず崩れない形の良いバストオブバスト、色もどんな手入れをしているのだろうと思うほどのピンク。マッサージの時にスパッツごしに触り、見たお尻は生で見ると思わず「安産型ですね」と言ってしまうくなる魅力あるお尻で、お湯に浸かってついた水滴は肌に弾いて綺麗だ、柔らかそうな体つきなのに腰はくびれが出来ていて締まるころは締まるといった女性なら10人に10人が羨ましいと答える体つきだ。そして何より俺は女性の全身裸体を初めて拝見した。生きてきた15年の人生でこんなイベントが起きるなんて予想も想像もしたことがなかった。なるほど女性のかはんし.....な...

.....て.....。

そんな思考の元俺は意識が薄れて行った。俺が最後覚えているのは、初めて聞く楯無さんの羞恥にまみれた悲鳴と、大きな胸を揺らしながら綺麗に決める楯無さんのハイキックの威力だった。

ヒプノイチカ【シャルロット編】

「……………催眠術か」

「ビクッ……！」

優希の口から不穏な単語を発せられ俺は内心で震えていた。

今日は休日と言うこともあって俺と優希は自室でくつろいでいた。

優希はベッドの上で雑誌を読み、俺はパソコンを開きネットサーフィンを楽しんでいたが、優希の「催眠術か」の一言で穏やかだった日常が曇って行く気がした。ちなみに優希が読んでいた雑誌は『SAMURAI style』と言うそれなりに人気のあるファッション雑誌なのだが、そんなファッション雑誌を見ていて何故催眠術と言う単語が出てきたのか理解に困るところだ。

優希とはまだ数週間の付き合いだが、これまでコイツと関わってきたロクな事がなかった、いい加減バカな俺でも学習するぜ。俺はネットサーフィンを早々と切り上げ危険地帯化しつつあるこの場から逃げようと部屋をでようとしたのだが。

ガチャリ

足元から金属音が鳴る音が聞こえ拘束されるような感覚が左足に感じしてみると、どう言うわけか鎖で繋がれた手錠がかけられていた。

「チョイと待つつさ【ひと】夏」

静止の声に振り向くと、手錠に繋がっている鎖は優希の手へと延びていた。

「な、何のまねだ!？」

「そう警戒しなさんな、少し頼みたいことがあるのさ」

「い、嫌だ! この手錠を外してくれ」

「ブブー。足に錠しているから足錠だ」

「どっちでもいい! 外せー!」

ジタバタともかく俺を見下ろしながら優希はお構いなく話を続ける。

「別に悪い事しようとしているわけじゃないんだよ」

「嘘つけ、この1ヶ月でお前がどんな奴か痛いくらい知ったからな。警戒くらいするぞ」

「ちょっと脳を、……………違った。洗脳するだけだよ」

「全然言い直せていない!」

俺は更にジタバタと動き難を逃れようとするが、優希からジワジワと押さえ込まれ最後には動けなくなってしまった。なんでこいつ腕細いのにこんなに力強いんだ?

「催眠術」

「は?」

「催眠術をかけさせてくれないか」

優希は無邪気な笑顔を見せてつつ俺の耳に囁いてくる。

「み、耳元で囁くなよ。催眠術？ あれって本当に効果あるのか？」
「それぞれとしてくる感覚に身悶えながらも俺は催眠術について論議する。」

「だから試しさ、効くかどうかの」

「わ、わかったよ」

優希の屈託な笑みで攻められ俺は断ることができずに了承してしまう。まあいいだろ、保証はないが催眠にはかからない自信はあるからな。

「ではでは」

俺は足錠(?)を外され椅子に座らされると優希が後方へと周り手で目を被われる。

「まずは定番的にリラックス」

首をゆっくりと回され脱力を要求してくる優希だが定番的につて別に言わなくていいだろ。

「君は今から女の子大好きな女たらし野郎になります」

「ぶっ！」

思わず吹いてしまう。

「な、なんだよ女たらしって！ 俺を何に仕立て上げようとしているんだよ！」

「ほらほら、リラックスリラックス」

「聞けよ！」

そんなこんなで罵詈雑言しつつ優希の催眠術実験は続いていく。

「いいかい？ キミは女の子に対して大胆になる」

（大胆？）

「まるで紳士のように振る舞い、肌が触れ合うスキンシップに抵抗を感じることなく接していけるナイスガイになる」

（紳士？ ナイスガイ？？）

「それじゃあ3つ数えたら起きるんだよ、3、2、1……ハイ起きて！」

パンツと手を叩かれ目を開ける。

「どうだい【ひと】夏？ 何か変わった感じはあるかい」

優希は好奇心旺盛な子供のような顔で俺の顔を覗き込んでくる。

「いや、別に変わった感じはしないな」

本当に何も変わった感じはしなかったので俺は正直に答えた。すると優希は「そんな〜」と心底ガツカリしていた。

「【ひと】夏が女の子をはべらす光景が見れると思ったんだけどない」

こ、こいつそんなこと考えていたのか？ どこまでも油断できない奴だと再確認しているとポケットから着信が鳴り、携帯がブルブルと鳴っていた。

「はい、もしもし」

『あ、一夏。僕だけど』

携帯から発してくる声の主はシャルだと一発で気づく。

「シャルか、どうした？」

『えっと、たいしたことじゃないんだけど』

「うん？」

『に、肉じゃがを作ってみんだけど、よければ僕の部屋にきて食べにこない？ 僕が一夏の部屋に持つて行くのが礼儀なんだろうけど優希くんもいるでしょ？ ふ、二人だけで話したいこともあるからさ』

「それはいいけど、そっちにだってラウラがいるんじゃないのか」

『え、あ、今は専用機の調整に出ているから居ないんだ』

携帯から聞こえてくる声はなぜか緊張している感じが伝わってくる。

「わかったよ今から行くから待っていてくれ」

「う、うん！ いつまでだって待ってるよ！」

「大袈裟だな、じゃあまた」

携帯を閉じ、俺はクローゼットから学生服を取り出し着替える。

「誰だったの？」

「シャルだ」

「デートのお誘いかい？」

「ばっか、違う。肉じゃが作ったから部屋にお呼ばれただけさ」

「それを、まあいいや楽しんでくるといいよ」

「ああ、早く行かないとな。『子猫』を待たせちゃ悪い」

「え？」

優希の若干驚いた声を聞きつつ俺は部屋を出た。あれ？ 俺なんかおかしい事言わなかったか？

「まあいいか」

自分に違和感を少し感じつつ愛くるしいシャルの元へと足早に歩くのだった。

「~~~~~ ふふふ」

上機嫌に鼻歌を交えながらシャルロットはグツグツと煮込まれた肉じゃがのダシを取り味見すると思った以上の味に気分が更に上がっていく。

（肉じゃがは料理部で何度か作っていたけど、一夏に食べさせる時にこの改心の出来ができるなんて、僕って幸せだな〜）

他に贅沢な幸せはないのかと言いたくなる幸せに浸るシャルロットはこのまま妄想を拡大していく。

（そう言えば一夏が言っていたっけ、日本の伝統料理である肉じゃがをつまく作る女の子と【結婚】する風習があるって）

正確には肉じゃがを作る女と結婚すると【得】であると言う伝承なのだが、このフランスの代表候補生は間違った風習を勝手に上書きしていた。しかし、妄想が先行する彼女にはそんなのは関係無いらしく更に妄想は続く。

（と、ととと言うことは！　い、いいいいー夏が僕の肉じゃがを食べたら！？）

結婚でくるのでは？　と、おめでたい妄想に浸るシャルロット。彼女の言い分で解釈すると日本の女は肉じゃがさえ作れば結婚できてしまう国と言うことになってしまう。ならばその作った肉じゃがをもし他の男に間違って食べられたらお前はそいつと結婚するの？　と言う疑問にいたってしまうのだが。しかし何度も言うように彼女は今妄想でヘブン状態であるためそんなことは関係ないのだ。

（一夏と、一夏と）

部屋に備えつけたテーブルに出来上がった肉じゃがの鍋を置き、何度も繰り返し食器の位置を確認補正する。

その時だった。

「おい、シャルってば」

「ひゃいー！」

肩をポムッと叩かれ心臓が口から飛び出すと言った比喻が正しいのではないかと思うくらいの驚きの声を上げた。

「いいいい、いち、いち、一、????」

「おお、わ、悪い。そこまで驚くとは思わなかった」

妄想していた本人が現れ心中でやましいことを考えていたこともあ

り、一夏を直視できないでいた。

「勝手に入って悪かったよ、何度もノックしたんだが返事がなかったからさ、何かあったんじゃないかと入ったんだ。鍵も掛かってなかったからな」

「あ、ああ。ごめんね心配かけて。か、考え事してたんだ」

「考え事？ 悩むことがあったらいつでも相談してくれよシャル。お前は俺の大事な人なんだからな」

「え？」

胸のキュンとする言葉にシャルロットは呼吸と時間が同時に止まった。勿論比喩ではあるが。

「ぼ、僕は大事な人？」

「？ 大事にきまつてるだろ、聞き直すほどのことか？」

「そ、それってつまり、……ぼ、僕のこと………すきい………」

「大好きだけど、それがどうかしたか？」

「！」

シャルロットの胸に、幸せのウエディングベルがこれでもかと言うほど鳴り響いた。胸が幸せで一杯になるなんて本当現実であるのだろうかと思っていたが、彼女は今それが現実にあるということが分かった。なぜなら今現在、自分が幸せで一杯なのだから。

「おーい、シャル？」

「え？ ああ、ごめん一夏！ 僕も大好きだよ！」

「サンキュー！ とりあえず座ろっぜ」

「うん！」

今日はきつといい日になると信じて疑わないシャルロットだった。

「これが肉じゃがの入っている鍋か？」

「うん」

「いい匂いが早くもしてるなー、うまそうだ」

「へへへ。ちよつと今回は自信があるんだ」

ミトンを手にはめ熱い鍋の蓋を掴み嬉しそうに開ける。

「おお」

感嘆の声を漏らす一夏の反応を見てシャルロットは人知れずガッツポーズをとる。

「じ、じゃあ肉じゃがをよそうね」

シャルロットはお玉を持ち、肉じゃがをすくい上げ並べていた食器に移す。

「はいどうぞ」

「ありがとう。おおーうまそうだ」

肉じゃがの主力であるジャガイモは見ただけで出汁が染みていることが伺えるほど茶色く染まり、見た目だけで食欲をそそぐ。

「でわ」

シャルロットのぶんの肉じゃがをよそののを確認し対面式に座った後一夏は手を合わせ

「いただきます！」

と声を出し、シャルロットもそんな一夏をかわいいなと思いつつ「いただきます」と続けた。

「あむっ」

「ど、どうかな？」

「うん」

「え！　へ、変な味でもした！？」

渋めの表情をする一夏に不安になるシャルロットは心配そうに聞く。だが渋い顔は演技だったらしく

「うまい！」

一変して明るい顔となった。

「ほ、ホント！？」

「ああ、すげーうまい！　いろいろ誉める所はたくさんあるけど、なにより味付けが俺好みだ」

「ありがとう！　一夏がそんなに言ってくれて嬉しいよ」

シャルロットは顔を少し朱に染めながら自分が作った肉じゃがの味付けが一夏に合っていた事に内心で大喜びする。

「いや本当うまいよ。シャルはいいお嫁さんになるな、絶対」

「お、お嫁さん！」

好きな人に「いいお嫁さんになれる」と言われれば舞い上がってしまつのはこの世の性、しかし今日のシャルロットはこんな事で満足するシャルではない。なんとと言っても「大好き」と言われたのだから。イケイケなのだ。

「な、なら、お嬢さんは、い、いち、いち、一夏が、いいなあ」

最後はかすれるように小さな声であったが、たとえ聞こえなかったとしても言い切った自分に満足であった。しかし、そんな健気な少女の勇気を神が見てくれたのか、その勇気は唐変木の耳に届いた。

「俺もだよ、結婚するならシャルみたいな子がいいな」

「！！！！」

今日の神様はここまでしてくれるのかと感謝に感謝を重ねる。

決めてしまおう！

シャルロットの心が決心する。

「い、一夏！！」

チャーチャラ、チャーチャーチャー

「あ、悪い電話だ」

思わぬ横槍にガクリと崩れるシャルロット。

「はいもしもし?」

出鼻を挫かれ戦意喪失しそうになるが今日の自分は違つのだと心に投げかけ電話が終わったら絶対言おうと心に誓う。
しかし

「おお、鈴。どうした?」

どうやらこの思いを告げることは叶わないだろうと悟る。

「今どこにいるかって? シャルの部屋だけど。な、なんで怒るんだよ?」

案の定一夏は自分の居場所を正直に答え鈴に罵倒されている。

「ああ、うん、分かった。あとで行くよ。え? すぐ来い? もうちよつと待っていてくれよ必ず行くから。ああ、それじゃあとで電話を切り、やれやれと言った感じで携帯を閉じる。

「悪いシャル、鈴が」

「いいよ別に、どうせ分かった事だしね」
シャルロットは頬を膨らませぶいっとそっぽを向いてしまう。

「うーん」

気を悪くしてしまったシャルロットの機嫌をどうやって直そうか考え、一つ思いつく。

「そうだ! 肉じゃがをご馳走してくれたことも含めて今度埋め合わせさせてくれよ」

「埋め合わせ?」

「ああ、今度シャルが行きたい所や、やりたいことがあるなら俺が

つき合うよ」

「ほ、ホントに？」

「もちろんだ！ 約束する」

「じ、じゃあ今してもらおう、かな」

「え？ 今からか？ 鈴を待たせているから出かけるのは無理だぞ？」

「ううん大丈夫、すぐ終わるから」

「？ すぐ終わるって、そんなのでいいのか？」

「うん。だから一夏」

「おう」

「目を閉じて？」

「一夏は言われるまま目を閉じる。」

「少し前かがみになって」

「ん」

.....ちゅっ。

「お？」

柔らかい感触が頬に伝わり何事かと目を開けると、シャルロットは大胆にも一夏の頬にキスをしていた。

「んっ」

ゆったりと一夏の頬から唇を離すと照れくさそうに笑った。

「こ、コレで無しにしてあげる今度はちゃんと一緒にいてね」
赤くなった顔を隠すようにまたそっぽを向いてしまった。

「……………」

一夏はポリポリと頬搔き、くすりと笑うと。

ちゅっ

と、まるで挨拶をかわすようにシャルロットの頬にキスをした。

「!!!!!!?????!」

まさかのキスのお返しに気を動転させるシャルロットをしり目に一夏は何事もないように

「ああ、約束するよ」

と約束を交わした。

「食器洗うのを手伝うよ」

「う、うん」

シャルロットはキスされた頬を手で抑えながら、魂を抜かれた詩人

のように呆けた声で頷いた。

それからの食器を洗っている数十分間シャルロットは何を話したか覚えていなかった。一夏が部屋を出て更に30分間呆けていたあと、やっとのことで我に返り、溢れてくる幸福感を抑えるようにベットに置いてある枕を締め付けるように抱きしめたのだった。

後日、悪夢を見ることになる織斑一夏はこう語っている。

・・・思えば、あの時に自分はおかしくなっていたことに気付くべきだった・・・

と

ヒプノイチカ「表裏別離なセカンド幼なじみ」

「……………」

鈴は怒っていた。

今現在彼女は二人つきりになるために学校の屋上にいるのだが、勇気を出して一夏に電話をしたにも関わらず当の本人はシャルロットの手作り料理をご馳走されていたのだから面白くない。

「ホント。面白くないわね」

不機嫌オーラを惜しみなく放つ鈴は静かに一夏への怒りを募らせるのだった。

ガチャリ

屋上の扉が開く音が聞こえ、屋上に入って来たのが一夏だと悟ると、鈴は勢いよく振り返り怒りの言葉をぶつけてやろうと怒鳴ろうとしたときだった。

「ふえ？」

柔らかい孤を描いて飛んできた缶を条件反射で受け取り、意表を突かれてしまう。缶の銘柄はコーンポタージュと書いてあり熱くない程度に熱を帯びていた。

「秋半ばなのに屋上で待ち合わせなんてするなよな、風邪でも引いたらどうするんだ？」

どこかいつもと違う一夏の雰囲気についたじろいになってしまう鈴であったが、いつもの強がりでそれを隠す。

「フ、フン！ 風邪なんて病気は私にとっては無害の範囲よ」

「無害の範囲でなんだよ」

「どおって事ないって意味よ！」

息を荒げながら怒鳴り一夏から受け取った缶のプルタブを開け一
気に口へと流し込む。

（……あれ？）

すると鈴はコーンポタージュのコーンが、口の中にいつも以上に多
く入ってくることに気付く。

「？」

おもむろに缶の銘柄を見るが、別に特別なコーンポタージュではなく、
よく自販機などで見るコーンポタージュであった。だが口元の下の方
分に違和感を感じ、目の高さまで持っていき見てみると、缶の口元
の部分が少し凹んでいた。

「一夏、どうしてこの部分だけ凹んでいるわけ？」

「ああ、そうすると凹んだ部分がジャンプ台の代わりになって粒が
綺麗に口の中に入っていくんだよ」

「ふ、ふーん。そうなんだ」

一夏の小さな気遣いに少しだけ機嫌を良くする。

「でっ、話ってなんだ？」

「あ、うん、あの……さ」

「おう」

「……………」

「？」

「一夏はその、私と居て楽しい？」

「は？ どうしたんだよ急に」

（あたしのバカ……！ 何言ってるのよもう！）

ただ二人つきりになりたかっただけで、コレといった用事も無く呼び出してしまったばかりに、テンパって変な事を言ってしまった自分にガッカリしてしまい、頭を両手でボカボカと叩く。

「おいおいおい、どうしたんだよ」

「いいの！ 今のはあたしが悪いんだから！」

自虐的になる鈴に一夏はハテナマークを浮かべながらも鈴の問いに答えることにした。

「ああ、楽しいな。お前がそばに居る。それだけで」

「え！？」

自分が予想していた言葉よりそれ以上の嬉しい答えに顔がみるみる赤くなっていく口元が緩んでしまう。

「ば、ばかり！ よくそんな恥ずかしいセリフ言えるわね！」

「お前が言わせたんじゃないか」

「う、うるさいうるさいうるさい、うるさい!!」

表に出せない喜びをワザと怒ることで一生懸命隠す鈴に一夏はそれとは別に、ある異変に気付く。

「鈴。立ち方が不安定なんだが、怪我でもしているのか？」

「え？」

「体重がなんか右寄りなんだよ」

「ああ、ちょっとラクロスで足を捻っちゃって、でも大丈夫、たいしたことないから」

容態の低さを見せるために怪我をしている左足を地面に踏みつける。

「っ!」

だが、いくら軽症と言っても捻った足首は予想以上に痛いもので顔をしかめてしまう。

「無理するなって、ほら」

「え？」

一夏は鈴に背中を向けてしゃがむと、おぶってやると言わんばかりの体制になる。案の定

「ほら、おぶってやるよ」
と、催促してくる。

「あ、あんたね! この年でおんぶされるなんて恥ずかしいのよ!」

「なんだよ、俺は気にしないぞ?」

「あたしが気にすつ……………へくちつ」

怒鳴ろうとしたが、意外と寒い屋上で体を冷やしてしまったのか、鈴は可愛らしくくしゃみをする。

「やつぱり寒いんじゃないか、早く中に入ろうぜ」

「ふんだ!、嫌よ」

意味も無く意地になる鈴に一夏はやれやれと頭を搔くと

「え? きやつ」

いきなり一夏に体を抱き締められた。

「な、なななななななにしてんのよ?!?!?」

「鈴は寒いくせに中へ入らないって言うし、ほついたら風邪ひいちゃうだろ? だから暖めてやってるのさ」

「だからって他にやりようがあるでしょ!?!?」

「無いな。中に入らないならずっとこうしていてやるからな」

「ず、ずつ……と」

その言葉にますます顔を赤くしていく鈴だったが、正直内心では幸せ過ぎて死にそうであった。

なので

「ぜ、絶対戻らないんだから」

「そうかよ」

「ふん」

ふてくされるような態度をとりつつも、鈴は一夏の胸に顔をうずめ、猫のように甘えるのだった。

結局鈴は30分も屋上で一夏に甘えまくった

織斑一夏、催眠効果取り返しのつかないほどに進行中

つかの間

「暇だな」

一夏が部屋を出てから一時間ほど経っただろうか、優希は暇を持て余していた。

（校内でもぶらつくかな）

優希はそう思い立つとベットから起き上がり制服に着替え部屋を出た。

寮内の部屋を出て直ぐに廊下で雑談をしている女子に遭遇し、そんな彼女達が優希に気付くとキヤーキヤーと嬉しそうな悲鳴をあげた。

「優希くんおはよー」

「うん、おはよう」

ただ挨拶を返しただけでまた再度キヤーキヤーと悲鳴があがる。普段ならこれで終わるのだが、一人の女子が優希へと近づいていった。

「あ、あの優希くん！」

「なに？」

「今日だけど、お昼一緒にどうか？」

時刻は12時前といい時間帯であった。今の優希は暇で断る理由も無かった。

「うんいいよ」

一発OKに誘った女の子は可愛らしくガッツポーズをする。

女の子はまたあとでと場所と時間を指定して自分の部屋へと走って

行った。

（初々しいな）

年齢に相応しい青春について微笑を浮かべてしまう。

約束の時間になるまで校内をうろつこうと歩き出そうとしたときだった。

「やるな饅虫、転向してきても青春を謳歌しているじゃないか」

「が、学生同士の男女付き合いは清く正しくしないと駄目ですよ」
優希の前に現れたのは一年一組の担任織斑千冬と、その副担任山田真耶だった。

「『せん』冬先生」

「漢字が苦手だと聞いてはいたが、よもや教員の名前を間違っほどとは、噂以上だな」

いつもならここで出席簿アタックが飛んできてもおかしくなかったが、優希の漢字間違いは教員でも有名だったらしく彼の頭を叩く事はなかった。

「違いましたか？」

「生憎あいにくな。周りの生徒には織斑先生と呼ばせているのだからそっちで呼べばいいだろ、『おりむら』とは読めるのだろ？」

「織斑は二人いるじゃないですか、下の名前の方が素敵ですよ」

「なら間違わず呼んでほしいものだな」

投げやりな感じで話す辺り、千冬も既に諦めている様子であった。

「全然違います!!」

廊下で大きく叫ぶ真耶は未だに驚きと恥ずかしさが止まなかった。それでもそのはず、もはや名前ですらなかったのだから。

バシン！ と優希の頭から小気味よい音が響いた。千冬が出席簿で叩く音だ。流石にこれはアウトだったらしい。

「馬鹿者。教員に向かって何を言っている」

「いやだって立派だから」

バシン！ また頭を叩かれる、今度は無言で。

「ゆ、優希くん！ いいですが、人の身体的特徴を揶揄するのはとてもいけない事なんですよ」

「別に揶揄したわけでは、……ですが確かに自分にデリカシーが欠けていました。すいません」

「わ、わかっていただければいいんです」ホッと胸をなで下ろし、生徒を一人改心させたことに満足していると

「では、次からバストGカップの意味合いから『G』てっ名付けますね」

さらに酷くなってしまった。

「な！ なんで知ってるんですか!？」

真耶はバストサイズを正確に言い当てられ激しく動揺する。

「ISに乗る際、頻繁に女になるからでしょうか。いつの間にか詳しくなっちゃいました」

「それ、理由になっていません!」

「嚙虫、少し指導室まできてもらっぞ」

ギラリと光る目で優希の首根っこを掴みズルズルと引っ張り歩き出す千冬。このあと三時間正座の説教を受けた優希だったが、懲りた様子はなかったと言う。

ヒブノイチカ【黒猫で子猫】

「やはりシユバイツァー・レーゲンのブースター出力を上げると機体が限界速度を超える上に私の技術では制御しきれなくなるか」

手に持った幾つかの資料を読みつつラウラは壁にもたれながら嘆息する。機体の限界ならまだしも、己の未熟も含まれているのだから不甲斐ないこと極まりない。しかも左目に移植された反射速度を上げる補助ハイパーセンサー『ヴォーダン・オージェ』を持ってしても制御できないのだからお手上げだ。

（何のための補助だ、馬鹿めが）

忌々しげに吐き捨て眼帯で隠された左目に手をやる。軍では常にトップを保ち続けた自分が、ISの登場のせいで移植する羽目になったこの目。そのせいでトップから転落し、出来損ないの烙印を押されることになった忌まわしき目。

（でも）

そんないい思い出の無い目を彼は、

一夏は褒めてくれた

こんな忌まわしいとしか思わなかった目を
綺麗だと

とても綺麗だと言ってくれた。

彼がそう言ってくれる限り自分はこの目に誇りを持てる。

護ってやると言われたあの日から好きになった少年は、日々強くたくましくなっていく。その度に前より更に彼を好きになっていくのが分かる。

（一夏、織斑一夏）

果たしてこの好きに限りはあるのだろうか？ そんな幸せな不安に顔が自然とほころぶラウラだったが

ピトッ

「ひゃうあ！」

いきなり冷たい感触が頬に伝い、人に知られば恥ずかしい感覚に浸っていたこともあつてか激しく驚いてしまう。

「！」

不意をつかれた上に恥ずかしい悲鳴をあげさせた犯人を投げ倒してやろうと勢いよく振り返る。

そこには

「おお、いいリアクションするな！。しかも可愛い悲鳴つきとは、ラウラにしては可愛いな」

「い、一夏！？」

今まさに脳内で思いを馳せていた人物が目の前に現れ再度気が動転してしまう。

「お疲れ。ジュースでも飲むか？」

「あ、ああああ、ああ」

「あ？」

「っ！」

一度に沢山の情報に整理がつかないラウラは、とりあえず当初の目的通り投げ飛ばすことにしたのだった。

「それで、貴様は何をしに此处にきたのだ」

「ラウラがISの調整で整備室にいるってシャルから聞いたからさ、差し入れを持ってきたんだ」

ムスリと聞くラウラに臆する様子もなく一夏は淡々と答える。

「ふ、ふん。嫁にしては従順なことだ」

わざわざシャルロットに居場所を聞いて差し入れを持って来てくれたの嬉しいのか、素っ気ない態度を取ろうとしてもつい顔が綻んでしまう。

「日曜に整備室にこもってISの調整だなんて、いくら軍人だからってちゃんと休まないと体壊すぞ」

ベンチに置かれた資料を拾いあげ興味本位で目を通して見る。

「馬鹿者。ドイツ専用機の情報機密だぞ、簡単にみるんじゃない」

「あ、悪い」

「ふー。まあ別によからう、どうせ没資料だからな」

「いいのか？ 見ても」

「既に目を通した癖によく言う。……かまわん」

「じゃあお言葉に甘えて」

そう言つて一夏は資料に目を通していき。

「なんだコレ、こんなに出力上げて制御できるものなのか？」

「無理だから没なのだ」

「そ、そうか。……………うわっ、今の出力でも俺より倍上じゃないか、一年最強は伊達じゃないな」

「白式は私のシュバイツァー・レーゲンより性能がいいはずだ。それが出せていないのならそれはお前の腕が未熟だからだな」

「うーん、反論できないのが悔しい」

「日々精進だ」

ラウラはクスリっ笑い一夏の持つて来た差し入れのスポーツドリンクを飲む。

「だな。今の目標はラウラだからな、そうするよ」

ポムっと柔らかい銀色の髪に手を置き上から下へと撫でる。

「ふわぁ」

一夏に頭を撫でられ、気持ち良さそうに目を細めるラウラ。

「ば、馬鹿者！ いきなり髪を触るな！」

「あ、悪い。嫌だったか？」

「い、嫌では、……ふわわっ」

また髪を撫でられゾクゾクする気持ちよさに吐息が漏れる。

シャルロットに髪をといでもらう気持ちよさはまた別な感覚に身を任せそうになる。

「ラウラは眼帯の下にある目も綺麗だけど、髪も綺麗だ。感触も俺は好きだな」

「す、好きっ！？」

この言葉にラウラの顔が完全に赤へと変わる。

（すっ、すすす好きだと！？ コイツは私を好きだと）
別に本人を好きだと言ったわけでは無いのだが、一夏ラバアーズの面々の脳内妄想は都合がいいのである。

（しかもまたあの目を綺麗だと言いおって、私は忌々しいと思ってるのに！ こいつは、こいつは、こいつはああああ！）この瞬間、ラウラの中の何かが切れる音がした。

「……………」

スリ、スリ、スリ

「ん？」

一夏は突如胸元がくすぐったくなっただのを感じ胸元を見るとラウラが一夏の胸に顔をすり寄せていた。

スリスリスリスリスリ

「おいおいおい、どうしたんだよラウラ？」

ラウラが起こした突然の行動に疑問を感じ、聞いたさすが

「……………」

甘える上目使いで口を三角にしながら見るだけで何も言わず、また同じように顔をすり寄せるのだった。

スリスリスリスリスリスリ

「おーい、ラウラー？」

スリスリスリスリスリスリスリスリスリスリスリスリスリスリスリスリスリ

もはや聞く耳がないと言った様子で一夏にすり寄るだけのラウラに、とりあえず再度頭を撫でてやると。

それにラウラは小さく「にゃあー」と鳴くのだった。

織斑一夏、後に彼はドイツの黒ウサギ部隊にこう呼ばれることになる。

『ドイツの冷水を猫にさせた男』

と

ヒブノイチカ【貴族からの視点】

初めまして皆さん、私はイギリス代表候補生のセシリア・オルコットと言います。母国では『戦場にワルツを奏でる妖精』とも言われていますわ。

最も、母国で戦場に行ったことはありませんけど、とにかくそう言うことですわ。

急ですがここ最近の私についてお話ししようと思います。一言で申しますと、

パーフェクトですわ！

失礼、つい舞い上がってしまいましたわ。でもこれは仕方の無いことなのです。だって、ISではブルーティアーズを最大稼働しないと発動できないフレキシブルを可能にしていますし、IS適性は向上の傾向にあるのですから。今まで私だけ一夏さんに勝てなかったのですが今では私が追い上げ2つ勝ち越すまでいたってますわ！お料理だって最近ではレパトリーは増え家庭的な女性と言うものが板についてきましたわ。なので前に一度一夏さんに食べさせたところ、顔を硬直させながら美味しいと言ってくれました。よほどおいしかったのでしょね。

こほん。

ですが、こんなパーフェクトな人生を歩んでいても一つうまくいかないことがありますわ。

それは勿論、一夏さんのことですわ。

こればかりはどうやってもうまく行きませんか、一夏さんの周りはライバルだらけですから。

胸の大きなファースト幼なじみにロリでツインなセカンド幼なじみ、僕っ子属性、押しの強い軍人と学園の完璧生徒会長にその妹（眼鏡装備）。あとあとIS世界最強の姉とロリな年上巨乳教師！ エトセトラ、etc.

悩みの種はつきませんわ。ちなみにこれらの呼び名は私のメイド、チエルシーの受け売りなので意味がよく分からないものもあります。試しに『属性』とは何かと聞くと、持っていると得する特殊スキルらしいのですが、意味がよくわかりませんでしたわ。

とりあえず得すると言うことですので、私にも属性が付いていることを切に願うところです。

「はあゝ」私は一つ溜め息をつき、自己解釈をやめて部屋をでるのでした。

「一夏さんに会いたくなってきましたわ」想ったら吉日と言いますか、一度想ってしまったなら即実行しないといけないのが人間の性。私は愛しき人のもとへ足を運びます。

やはり愛する人に会うからでしょうか、足がいつもより軽い気がします。一夏さんにあつたらまず何をしましょう。もし許されるのでしたら、

（甘、あま、あま、甘えたりなんかし、したいですわね）
期待に胸を膨らませる私は今日は決めてしまおうかと模索します。
すると

「あら？」

私の左斜め75°の方角に私の見間違いでなければあれは一夏さん
ではありませんか。

目を凝らしてもう一度見てみてもあれは間違いなく一夏さんですわ。

（会いに行こうとしたら直ぐに会えてしまうなんて、これもパーフ
ェクトのなせる技なのでしょう？）

私は運命を感じながらも目の前に現れた一夏さんのもとへと駆け寄
ります。

「一夏さーん」

「お、セシリア」

私の声に一夏さんは、いつもと変わらない気さくな返事を返してき
ます。

「こんな所で何をしてらっしゃいますの？」

「別に何も、すること無くなったから部屋に戻る所だ」

「そうでしたの。では私も一緒にしてよろしいですか？」

「ああ、かまわないよ」

一夏さんの一発OKに私はつい顔を綻ばせてしまいます。それにし
ても一夏さん、女の子を簡単に部屋へ入れるなんて案外大胆ですわ
ね。

たわいのない会話をしているうちに一夏さんの部屋へと着きます。
ああ、どうしましょう。今から一夏さんの部屋で二人つきりですわ
！ そんなこと考えていたら胸がドキドキしてきました。も、もし
間違いないかが起きたらどうしましょう！ 別に嫌ではありません
けど、でも、ほら！ 物事には順序というものがありますし、ああ
ゝ、でも、でも！ 大人の階段なんて何段抜かそうと関係ありません
わよね？ 何て言っただて階段ですもの、何段だって飛んで見せま
すわ。二十段くらい。

そんなウキウキ気分しているとドアの前で一夏さんが口を開きます。

「中に優希がいると思うけど、気にしないでくれ」

「あつ」

私はそれを聞いてガツクリとうなだれます。そうでした、忘れてい
ましたわ。今一夏さんにはルームメイトがいたのですわ。

一夏さんの部屋に行くこと決まった時点で気づくべきでした。完全に
舞い上がってしまったって気づきませんでしたわ。

「大丈夫か？」

余程ガツカリしていたのか一夏さんが心配そうに話し掛けてきます。

「ええ、何でもありません。大丈夫ですわ」

「そうか？ とりあえず部屋に入ろう」

一夏さんは部屋のドアを開け中へと入っていき、私もよろよろとし
ながらも一夏さんの部屋へと入って行きます。

すると

「あれ？ 優希が居ない」

「！」

私はその言葉に目を輝かせます。

「ほ、本当ですか！？」

「お、おお」

私は嬉しさのあまり大きな声をあげてしまい、一夏さんは驚いた様子、少々はしたなかったかしら。

「好きな所でくつろいでいてくれ、俺はお茶を用意してくるよ」

「は、はい！」

緊張気味の私は椅子に腰掛け一夏さんを待ちます。この待つと言う行為はどこか落ち着きませんわね、好きな人を待つなら尚更。などとそうこうしている内に一夏さんが戻ってきます。

「はいどうぞ」

一夏さんは少々熱めのお茶と、緑色のゼリーに生クリームが載ったお皿を持ってきました。

「一夏さん、これは？」

不思議そうに聞く私に一夏さんは答えます。

「青りんごゼリーだ。昨日作って余っていたんだ、ちょっと食べて見てくれないか？」

「いただきますわ！」

そう言えば一夏さんは料理もお上手でしたけど、デザートも作れま

したわね。前に一度ご自宅でコーヒージェリーをいただきましたけど、とてもおいしかったのを覚えていますわ。

「でもどうして青りんごゼリーをお作りになりましたの？」

「昨日優希が青りんごゼリーが食べたいから作ってくれって言うてきてさ、最初は断ったんだけど『作ってくれないとIS展開して誘惑するぞ』て脅迫してきたから仕方なく作ったんだ」

一夏さんはとてもげんなりした様子で苦労話をします、

「そ、そうでしたの、それはお気の毒でしたわね」

そんな一夏さんにかける言葉が見つからず、出していたいたゼリーを口に運びます。

「！　おいしい」

市販のはずなのにこれほど青りんごの風味を出せる一夏さんの料理の腕は一般の域を明らかに超えていますわね。

「よかった、青りんごゼリーは作ったことなかったから不安だったんだ」

「それでいてこのおいしさですよ！」

「まあ、コーヒージェリーの応用だからな、難しくはないさ」

自慢できる事を鼻にかけない。一夏さんのいい所です。やはり結婚するならこういった方としたいですわ。と言いますか、一夏さんと結婚したいですわ。

「あっ、セシリア」

「はい？」

機嫌良く振り返って見ますと一夏さんの手が私の口元に触れます。

（えっ）

高鳴る鼓動がもしかしてと告げてきます。

（も、ももしかしてこれは！）

キス？ と。

とつさの出来事にも関わらず、私は目を瞑ります。 やっと！ やつと私の悲願がここで！

ですが、所詮は悲願だと神が呟きました。

口元に触れた手が、サツと口元を拭きます。

（は、はい？）

「口元に生クリームがついてるぞ」

ガクーーーーー！

（ま、またこんなオチですの！？）

そうです、いつもこんなです。 いい雰囲気を持っていけない。 いかない。 だから進展しない。 私の恋は常に地団駄を踏んでますわ。 しよげる私は少し涙目になりながら一夏さんの方へと向き直ります。するとそこにはいつもと違った風景が広がっていました。

パクリ

（え？）

「一夏さんが私に付いていた生クリームを、恋人のように、な、舐め

「口にクリームをつけるなんてセシリアも子供っぽい所があるんだな」

「え？　そ、そ、そうですね、お恥ずかしいところをお見せしました。ほ、ホホホ」気が動転している私に対して一夏さんはいたって普通の様子、私だけが意識しているみたいで釈然としませんわ。

「お嬢様なのどこか抜けてる。そんな所がセシリアの可愛い所だな」

「か、かわいい、……………私が」

今まで綺麗な美人だと言われたことは多々ありますが、か、かわいいと言われたことは無いので少し、いえ、大いに恥ずかしいですわ。一夏さんから見れば私は子供っぽく見えるのかしら？　ああ、でも一夏さんにならそう見られて嫌な気はしませんわね、むしろ嬉しい。

「セシリア？」

「いえ、なんでもありませんわ」

今はこの幸せなひとときを堪能しませんと。

「一夏さん、隣に座ってもよろしいですか？」

「ん？　別にかまわないけど、どうしたんだよ急に？」

「お、乙女にはそういう気分になる時があるのです！」

正直申しますと既に自分が何を言っているか分かりませんでしたけど、一夏さんは快く私を受け入れてくれました。

それから私はこの甘いひとときを堪能している間、今日の出来事を『幸せ日記』に書くと心に決めるのでした。

ヒプノイチカ【武神恋々】

『織斑くん？ さつきデユノアさんと部屋から』

「……………」

『屋上で鈴さんというの見たけど』

「……………」

『さつき整備室でラウルさんと』

「……………」

『え〜とね〜〜オリムーならセッシーと〜』

「……………殺す」

篠ノ乃箒、人知れず一夏の抹殺を企むのだった。

箒は午前中までであった部活の帰り道、体力も有り余ってか一夏を稽古に誘おうと一夏の部屋へと行ってみたが居らず、仕方なくいろんな人に居場所を聞いていくと、いろんな女の子と一緒に居たことを知る、それ故に一夏抹殺と言う考えに至る。

（前々から奴は色気があり過ぎると思ってはいたが、さすがにここまでくると笑えないぞ！）

怒りの炎は増すばかりで、鎮火する様子が全くなかった。

（さあ一夏、何処だ？ 見つけ次第この世の地獄を見せてやるう）
今の彼女の思考と表情を見れる第三者が居たならば、きっと「逃げろ一夏！」と叫んでしまっただろう。

鬼の形相で箒は一夏を探す。

すると

「……………いた」

持ち歩いていた竹刀を袋から抜き取り下段構えで一夏へと接近して行く。

そんなことを知らない一夏は呑気に手元に持っている『何か』を見ている。

（そのまま動くな一夏、間違って動くと一撃で仕留めきれなくなるからな）

箒は眠狂四郎のように下段に構えた竹刀で円を描くように上段へと構え直す。

その体制で数秒、手元を見つめる男子と、それを後ろから闇討ちしようとする女子の奇妙な光景が続く。

すると一夏の手が頭へと動く。

「！」

それが合図であるかのように箒も動く。

「一夏あああー！！！！！！！！！！」

今まさに竹刀を振り下ろさんとする箒がいるとは知らず、一夏はクルリと後ろを向く。

「箒？」

「ぬわ？」

振り返る一夏に強烈な一撃をお見舞いする筈であったが、箒は振り下ろそうとした竹刀を途中で止めてしまっていた。

そのせいで勢い余って顔面を地面へと突っ込んでいた。

その理由は一夏が頭に『猫耳』と言われる萌グッズを着けていたからだった。

「何やってんだ箒？」

「い、一夏こそ、そ、それは？」

鼻をぶつけてしまったのか、涙目になり鼻を押さえながら一夏に頭の付属品について聞く。

「ああ、これか？ これはさっき新聞部の黛先輩がコレを渡して来てさ、それを着けた俺を写真に撮りたいなんて言われたから嫌で逃げて来たんだけど、慌てて持ってきたちまったんだ。せつかくだし興味本位で着けてみたんだ、どうだ？」

「え、ああ」

まさか一夏が猫耳を着けるとは思わなかったのになんと言っているのか悩んだが、しかしそんな一夏を見て、箒は正直

（か、かわいいいっ）
と思った。

「箒?」

「う、うむ、男がそんな物を身につけるのは感心しないな」

嘘である。できるならこのまま一夏を持って帰りたいとさえ思っている。

「駄目か?」

猫耳を着けたまま小首を傾げる一夏。

(キュ、キュート!)

「お?」

箒はたまらなくなり、ついに一夏の顔を胸へと埋める。箒はついに一夏を小動物としか見れなくなっていた。

「どうしたんだよ箒?」

柔らかい感触に戸惑いながら箒を問いただが、彼女の耳には入っていないようだ

「大丈夫。ちゃんと育てる。ちゃんと育てるから、一夏は私が育てるから!」

「おーい」

「ふふふふ」

完全に我を失っている箒に一夏は一つ溜め息を吐くと、箒の拘束から抜け出すと。

パク

「ひゃわわ！」

箒の耳たぶを甘噛みした。

「落ち着け箒、取り乱し過ぎだろ」

「い、一夏！？」

拘束を抜け出した際に猫耳も取れ、通常の一夏を見たこともあつてやつのことで我に返る。

「落ち着いたか？」

「あ、ああ。しかし何も耳たぶを噛むことはないだろ」

「悪い、嫌だよな」

「い、嫌では」

噛まれた耳たぶを指でさすりながら顔を赤くする。

「それにしてもあれだな」

「な、なんだ？」

「箒っていい匂いがするんだな、優しい匂い。柔らかくて、とても落ち着くよ」

「な！？ は、破廉恥だぞ馬鹿者！ 匂いとか、柔らかいとかは、わざわざ言わなくていい」

「悪い悪い、確かにそうだな」

「う〜」

箒は一夏の妙な落ち着きぶりに違和感を感じながらも、ただただ縮こまるしかなかった。

「……………」

「……………」

一時の沈黙が続き、気恥ずかしい間のなか一夏が口を開く。

「……………あのさ、箒」

「な、なんだ」

「……………もう一度、抱き締めてもらっていいか？」

「……………なに!？」

「今日だけでいい、箒に抱き締めてもらって俺本当に安心したんだから、……………もう一度」

一夏の目は下心の無い真っ直な瞳をしていた。箒もそれを感じとったのか、紅潮した顔を一度俯かし

「わ、分かった、ど、どうしても言うなら」

箒はもう一度、一夏の頭を優しく掴み、ゆっくりと胸元へと持つていく。

「んっ」

一夏は優しい匂いと、柔らかい感触に身を委ね、目を瞑る。

そして

「ありがとな、……………篇」

小さく、想いを込めてそう呟くのだった。

催眠から一夜明け

「一夏、なんであんたがそうなってるか分かるわよね？」

鈴は仁王立ちで俺を見下ろし怒りの目を向けている。そんな俺は両手を後ろに縛られ正座し、首から【私は女の敵です】というプラカードを掛けている。

「え、と、……すまん、さっぱり」

「だ」 ひゅん カッ！

「あ、あ」

昨日なにがあったか覚えてない俺は正直に覚えていないことを告げようとしたら、ラウラがナイフを投擲し、頬をかすめる。

「言葉に気をつけろ、下手な発言は命を縮めるぞ」

冗談に済みそうにない殺気を放つラウラから視線をそらし違う面々に目を向けて見るが、全員比べようのない怒りの顔で睨んでいる。

今俺が何故こんな事になっているのかと言うと、昼の昼食をいつものメンツで食べていたら、セシリアが昨日俺の部屋でデザートを食べながら甘い一時を過ごしていたと俺の記憶にない自慢話をした所から始まった。すると第達も、「それなら昨日自分も」と言い出し、これは一体どういう事だと言う事になり今に至る。

「一夏あー、覚えてる？ 昨日僕のほっぺにキスしてくれたんだよ」

シャルは、まるで病んでるかのような目で話してくるので、それがちょっと怖い。

「う。そ、そんな事を俺がしたのか？ …………… すまん覚えて、うわ！ 待て待て！ 銃口を向けるな！」

こめかみに銃口が当たただけで命が減っていくような感覚に襲われる俺。と言うかシャルってこんな事するキャラだったか？

「しょうがないだろ、本当に覚えてないんだから！ 昨日最後に覚えていた記憶って言ったら……………」

俺は昨日の記憶を辿って行ってみる。確か普通に休日を過ごしていた、…………… そしたら確か

「おつ！ 首にプラカード垂らして正座なんて面白い事やってるな」昨日の記憶を辿っていたら、偶然通りがかった優希が話しかけてきた。あれ？ そう言えば

「なあ優希、昨日俺に何かしなかったか？」すると優希は「あつ」という顔になり、しばし考えると面白い事を考えたといった顔になる。うわ、悪い予感。

「ああ、昨日は驚いたよ『ひと』夏、わざわざオレにIS展開させてあんな事求めて来るなんて、『ひと』夏は意外とマニアックだな」。まっ、嫌じゃなかったからまた今度もやろう」

優希はいろいろ誤解されそうな事を言っ、一度手をパン！ と叩き教室へと帰って行った。

「お、おい何言っ、て、アー………！」

思い出した昨日の出来事は勿論、その原因も。元はと言えばアイツ

のせいで！

問い詰めてやろうと立ち上がろうとしたときだった。

「おう？」

再度床へと座らされた。

「どこへ行くつもりだ？ 話はまだ終わっていない」
ラウラがドスのきいた声で俺の体を拘束する。

「ち、違っただラウラ！ これには訳が、
いや、陰謀が！」

「もう無理だ、諦めろ一夏」

「そうですわ、罪状も一つ増え、有罪確定ですわ」
箒とセシリアが体を揺らつかせながら俺に近づいてくる。うわ、ス
ゲー怖い。

「最後に残す言葉はあるか？」

「まっ、待ってくれ！ せめて釈明を！」

「」「」「」却下！」「」「」

「待つて、あ、あ、ああ、ああああああああああああああ
あああああああああー！！」

この日、俺は一瞬でも星になれたんだと思う。

第二幕 前兆

海の底に沈んだかのような暗い空間に、一人の少女がうずくまりながその暗い空間を漂っていた。

ここは何処だ？

少女は今自分が何をしているか分からず心の中で疑問を口にする。
一つ分かっているのは、目さえ開けることさえできず、ただ自分が
無重力のように漂っている事しか分からない。

『お前は戦うためだけに生まれた戦闘人形』

？

突然の声に少女は小さく小首を傾げた。

私が戦闘人形

少女は心の中でその言葉について考える。

.....

そして納得する。

そう。私は戦いのためだけに生まれた。

『戦うことがお前の全て』
再度謎の声が少女に響く

そう、全て。.....だった。

『戦う以外に価値は無い』

違う！

少女は否定する。

初めはそうだったかもしれない、だが今は仲間がいる。尊敬する人もいる。そして

好きな人もいる

『……………』

謎の声は静かに黙る。まるで何かを考えているようでもあった。数秒の沈黙の後、謎の声は再度語りだす。

『その男が【遺伝子強化素体】であるお前を好きになるとは到底思えない』

！

なぜそれをと少女は思う。だがその前に否定しなければならない事があった。

そんな事はない！ 彼は、彼だけはこんな私でも受け入れてくれる！

そう、彼ならばと少女は信じている。

『試験管から生まれた紛い命で』

黙れ

『戦う、それだけのために生まれた存在で』

シュヴァルツェ・ハーゼ

小鳥達がさえずり出す明朝、

「ぬうわあああああああ！！！！！！」

そんな静かな朝は、俺の叫び声によって破られた。

それは俺のベッドに全裸の女性が入ってきていたからだ。勿論こんな事するのは一人しかない。

「なにしてるんだようウラ！」

ドイツの代表候補生であるコイツだ。

「あふあ、……何を驚いている？ 夜の営みなど夫婦である私達には当然の事だろ」小さいアクビを漏らし、平然とおかしなことを言うウラウラに頭を痛めつつ俺はため息をつく。ちなみに今は朝なので夜のなんたらではない。

「一体どうしたんだようウラ、前の一度だけ忍び込んできただけでそれからは来なかったのに、ここ最近毎日じゃないか」

「……………駄目なのか？」

「だ、駄目だろ」

「……………嫌なのか？」

「え？ そ、それは」

つい考えてしまったのがいけなかった、ラウラは口元をニンマリさ

せると全裸で俺に垂れかかってきた。

「ば！ 待て待て近寄るな！ あっ！ 密かに手を背中に回すな！」

（チクシヨウ！ なんでコイツこんなに柔らかいんだよ）

甘い匂いと柔らかい感触は、俺の男である感情を刺激し、抱き締め
てやりたいという気持ちを抑えるのに必死だ。

そんな感じでラウラと攻防を繰り返している

「うつ、むゝ。うるさいぞ」『ひと』夏うー」

隣で寝ていたルームメイト轡虫 優希が目を覚ました。

そうだ！ そうだそうだそうだった。今俺にはルームメイトが居た
のだった。

「優希！ 頼む、助けてくれ！」

必死で助けを求める俺に優希は寝ぼけ眼で俺の現状を見る。

「……………」

しばし考え、一度頷くと

「ラウラ、何分で済む？」

と聞いてきた。

「……………」

すると今度はラウラが考え出し、優希と同じように頷き。

「一時間だ」

と答えた。

「一時間かゝ。長いなー」

優希はポリポリと金髪に赤いアツシユの髪を掻きまた少し考え。

「歯磨きと朝食を終わるまでには終わらせといってくれ」
などと言い出した。

「努力しよう」

あれ？ この人達はなに言ってるの？

それで会話は終わったのか優希は自分の歯磨きセットを持って部屋を出て行くのだった。おーい。

俺の願い虚しくパタリと扉が閉じられる。

「……………」

無情に閉じられた扉を見つめる俺。するとマウントポジション気味に俺の上に乗っかっているラウラが口を開いた。

「奴は悪くない」

「え？」

「奴は読んだのだ」

「……な、何を」

息をのむ俺にラウラたっぷり間を置き、答える。

「……………空気を」

「！」

ラウラの体がゆらりと揺らぐ。

「ま、まで、ラウラ！ 早まるな」

ラウラの頬が赤く染まり、潤んだ瞳が俺を見据えている。やべー、すげー色っぽい。見とれる。日も高くなってきた、日差しがカーテンから漏れてラウラの銀髪をキラキラと輝かせている。

「一夏、安心しろ。私も、初めてだ」

「ううう」

や、やばい！ 拒めなくなる！

ゆっくり、ゆっくりとラウラが近づいて来る。

「いち、か」

近づいて来るラウラの顔、透き通る白い肌に、人形のような顔立ち、こんな綺麗で、可愛い女の子が俺を求めている。

「ら、ラう、ラ」

観念した俺は静かに目を瞑っ

ガチャリ ドタドタドタ

「一夏！ 平日でもたまには私と朝稽古を」

観念した俺の耳に聞き慣れた声が聞こえ、声の方角に視線を移すと。

「なっ！」

俺のファースト幼なじみ、篠ノ乃 箒が竹刀を肩に担ぎ立っていた。

「……………」

カタン

箒は持っていた竹刀を落とし呆然としている。どこかで見た光景だ。いや、シチュエーションだ。

「また貴様が、いつになっても不作法な奴だ、今から夜の、違うな。朝のいとなみをするから早くこの部屋から出て行くがいい」
まるで勝ち誇ったかのようなラウラの余裕の笑み。

「朝の、いとなみ？ ………………ふ、ふふふふふふふ」
急に箒が肩を揺らしながら不気味に笑い出した。こ、こえ。

「待て箒！ 誤解だ！」

「誤解なものか、これが、…、…、…、…、全てだ」
ラウラはなんかもう自慢げだ。ちよっとしゃべらないで下さい。ラウラさん。

「そ、それにしても箒、あれだな、よく入ってこれたな、鍵閉まっていたか？」

ラウラは優希が空気を読んだと言っていたから俺とラウラがその、つまり、あれだ、わかってたってことだろ？ だから鍵を閉めて行つたはずだ。

「鍵なら開いていた」

「え？」

優希はどうやら空気は読めたが気配りはできなかったらしい。

「鍵もせずにこんな淫らな行為をするという事は、見せつけるきまんまんだったわけだな」

「な、なにを言っているんです？ ほ、篤さん？」

篤は何かを持つような手で構えると、そこから粒子が集まり刀へと変わる。あれは雨月？ いや空裂か。

「死ね」

「う、あ」

人を殺す目をご存知だろうか？ 今まさに目の前にいる人物がそれだ。

この後2秒後に刀は振り下ろされベッドを切断された。自分が切断されなかったただけラッキーである。刀は空裂だったらしく斬撃が発動し部屋意外の窓や床を切り裂いた。

この騒動に気づいた千冬姉と山田先生が入ってくる数分までこの騒動は続いた。

IS学園の学園長室にて、一人の女性が軍隊さながらの姿勢で立っていた。その女性の名は。

「久しぶりだな、クラリツサ」

「はっ！ 教官もお元気そうだなによりです！」

クラリツサ・ハルフォーフ。ラウラと同じドイツの部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』通称『黒うさぎ部隊』に所属する軍人である。そして織斑千冬がドイツで一年間教官として指導した部下でもある。

「そう固くなるな、今の私はただの教師にすぎないのだからな」

「いえ、そう言う訳にはいきません。隊を離れても、私にとって教官は教官です」クラリツサの頑なな態度に千冬はやれやれといった感じでため息をつく。

「それではクラリツサくん。IS学園に来た理由を教えてもらえるかな？」

二人の会話に割って入ったのは学園長の椅子に座る穏やかな顔をした初老の男だった。彼の名前は轡木十蔵くつわき じゅうぞう普段学園の用務員の仕事をしている男だ。

「はい。しかし学園長は男の人だったのですね。資料では女性とお聞きしましたが」

「ええ、その通りです。しかし、今は仕事で国外に居るのでご不満でしょうが代理で夫である私がお話をお伺いします」

「いえ、お構いなく」

クラリツサは一度一礼すると、IS学園に来た経緯についてを話し出すのだった。

壮絶な朝を終え、俺は現在二限目の授業に参加している。

（今朝は危なかったなー、最後に簿が雨月を展開させた時は人生の終わりを感ぜたぜ）

千冬姉達の到着が少しでも遅れていたら俺は蜂の巣になっていただろう。

ブルッ

俺は肩を震わせつつ簿の方をチラリと見た。

「……………！（ぷいつ）」

目が一瞬あつたが怒るようにそっぽを向かれた。

うーん。確かに破廉恥ではあつたが何もあそこまでへそを曲げなくてもいいと思うのだが、簿心は複雑だ。

次にラウラを見ている。山田先生が黒板に書いた数学の公式をノートに写さず、腕を組み黒板を凝視している。このことについて何故かと聞くと、あれくらい暗記できるとのこと。もしかしてラウラって天才なのか？

すると俺の視線を感じ取ったのか、俺の視線に気づいた。

「……………」

箒とは打って変わってラウラはまた朝見た勝ち誇った顔で笑みを作り、視線を返してくる。

（何なんだよ）

俺はうだるように机に突っ伏してしまう。

そのときだった、教室に異様な人達が侵入してきたのは。

「きゃあー！　ここが隊長のいるIS学園なのですね！」

「こらっアデーレ、授業中なのだから静かになさい」

「でも興奮する気持ちは分かります」

「あれ？　あれ隊長じゃないですか？」

「きゃあー！　お久しぶりです隊長ー！」

ワイワイガヤガヤと入ってくる大勢の若い女性達。何事かと俺は驚きを隠せないでいた。何気なく入ってきた女の子達を見ると、ある特徴に気づく。

全員左目に眼帯をしているのだ。まるで、

そんな風に俺が答えを導き出す前に、その人物が口を開いた。

「おまえ達、なぜここに！？」

彼女達と同じ、左目に眼帯をした女の子、ラウラ・ボーデビツヒだ。

そう。彼女達はドイツ最強のIS配属特殊部隊、『シュヴァルツェ・ハーゼ』の面々だった。

戦士達の休暇は

ドイツのIS配属特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の人達が来て5日が経ち、穏やかな1日があったことは一度もなかった。最初の1日なんか終わりのない質問責めにあったからな。その内容はこうだ。

『あなたが織斑さんですね！ 噂はかねがね！ 急ですが質問です、ボーデビツヒ隊長とはどこまでいきました！？』

『隊長にキスしたって本当ですか！？』

『隊長の事どう思ってます？』

『あ、あの、メルアド交換しませんか？』

『キヤー！ デリアだいたくん。隊長の恋敵に立候補するき！？』

『ち、違うわ！ 私はただ』

『隊長に20ユーロ』

『私50！』

『デリアに100ユーロ』

『大穴だ〜！』

こんな具合である。そのあとシュヴァルツェ・ハーゼの大尉である

クラリツサさんと、偏頭痛を発症させたようにコメカミに指を当てた千冬姉が入って来て彼女達が来た理由を教えてくれた。その理由が『隊長の様子と進展が気になったから』らしい。そんなんで軍隊って長期休暇取れるものなのか？

（そりゃあ千冬姉も頭を痛めるよな）

千冬姉に同情しつつ俺は崩れかけのジェンガの板を抜くのだった。

ちなみに今日は土曜の休日で俺は今ラウンジで優希と鈴でジェンガをやっている。

ガシャン

「はいー夏の負けー、罰ゲームにデコピンね」

鈴は嬉しそうに言う俺の額に強烈なデコピンを炸裂させる。

「ぐあつ、イッテー！ 少しは手加減しろよ」

「ふふん。悔しかったら勝つことね、次は優希よ」

「よし。ISを展開した状態でデコピンを試してみよう」

「頭を吹っ飛ばすつもりか！？」

間違いなく十針はいくだろ。相変わらず恐ろしい事しか考えないな優希は。

「さあさあ、次いくわよ次！」

勝負好きの鈴は嬉しそうにジェンガを積んでいく。

「なあ優希」

「なんだい？」

「シュヴァルツェ・ハーゼの人達の事どう思ってる？」

「最近来たドイツの特殊部隊の事か？」

「ああ」

「別にどうもしないな、軍人なのに可愛い子がいっぱい居たってくらいかな」

「うわっ、不純ね」

優希の答えに鈴は軽くひいたようだ

「『ひと』夏だってそう思ってるよ」

「一夏！」

「え！？ 俺を巻き込むなよ！」

「でも可愛いかったろ？」

「そりゃあまあ」

「いゝちゝか」

「だ〜！ 感想だつて個人的な！」

鈴をなだめつつジェンガを積み終え、第3回戦目に突入しようと、一つ目の板を抜こうとしたときだった。

「あつ！ いたー！ 織斑さん！ デートしましょう！」

ラウンジの扉が開き入って来たのはシュヴァルツェ・ハーゼの人だった。

突然入ってきていきなりデートしようと驚く事を言ってきたせいで、一回目でジェンガを倒してしまう俺。

ゴゴゴゴゴゴゴッ！

異様な殺気を俺は後ろから感じとり、恐る恐る振り返って見ると、そこには鈴が右手にISを部分展開させデコピンの形を作っていた。

なぜ！？

「それで？ シュヴァルツェ・ハーゼの皆さんはなんで私達をお呼びになったのですか？」俺達と同じく校庭に呼ばれたセシリアは意図が分からず俺に聞いてくる。

「さあな、俺も連れてこられた身だからわかんね」

「そうですの、それにしても一夏さん。おでこが凄く腫れてますけどどうしましたの？」

「大したことじゃないから気にするな」

「そ、そうですの」

「ああ」

俺は赤く腫れた額をさすりながら鈴の勘違いで受けた傷を隠すのだった。

「では皆さんに集まってもらった理由についてお話します」

クラリッサさんはみんなの前に立ち、聞き取りやすい声で話した。

「実は私達シュヴァルツェ・ハーゼはどうしても連れて行ってほしい場所があるのです」

「連れて行ってほしい場所ですか？」

シャルは不思議そうに聞く。

「そうです。そこは日本の文化を知るには絶好の場所だと聞きます」
熱弁するクラリッサさんはそこに行くのが余程楽しみなのか目がキラキラしているのが分かる。

日本の文化が分かる場所、うーんやっぱり京都かな？

「それで？ 行きたい場所とはどこだ？」 ラウラは腕を組みクラリ

ツサさんに行きたい場所について聞く。

「はい。それは」

目を閉じ、間を整える。まるで今から行く場所に対して敬意を評するように。

真剣な空気に息をのむ俺達

「それは」

ゴクリ！

「秋葉原です！！」

.....え？

「あ、あの、日本の文化を知りたいんですね？」

「その通りです」

「それが秋葉原にあると？」

「はい」

「.....」

なぜクラリツサさんは秋葉原に日本の文化があると言い出したのか分からず俺達は首を傾げてしまう。あそこは電化製品など盛んなだ

間違いは聖地にあり

「こ、ここが日本の聖地と呼ばれる場所、秋葉原なのですね!」

「そうだ! 日本の歴史が詰まった場所だ!」

「……………」

俺ははしゃいでいるシュバルツェ・ハーゼの人達に「違います」と言えない歯がゆさにさいなまれていた。

「それで大尉、まずはどこへ行くのですか?」

「うむ、まずは『とらのあな』へ行こうと思う」

「虎ですか? なんか快々しい場所そうですね」

「フッフ、案ずることはない。日本の歴史を漫画で分かりやすく描いた本が売られている場所だ」

「歴史をあえて分かりやすくするために漫画にするなんて、しびれます!」

「ふふ、そうだろう。よし! では行くぞ!」

「「はい! お姉様!」」彼女達は夢の扉を開くかのように『とらのあな』へと入って行った。

「お姉様！ あの人とても奇抜な服装をしています！」

「あれはアニメのキャラクターを扮する行為、コスプレだ！」

「アニメのキャラクターをですか？ なぜそんなことを」

「彼女等はアニメのキャラクターに扮することでそのキャラクターのいい所を学ぼうとしているのだ！」

「なるほど、まずは形から言うことですね！？」

「そうだ！」

「お、おおおおお姉様！」

「どうした！ 何を動揺している」

「男が、おお男の子が同じ男と、い、いかわしい事をしている本を見つけました！」

「それはBL本だ」

「ビーえる？」

「ボーイズラブの略称だ、男が男を好きになるのを題材にしたものだ」

「大尉！ これは駄目です！ 女の子同士ならまだしも、男の子同

士だなんて。これはさすがにアウトです！」

「甘いぞコルネリア、これは一見不純に見えるがそうでは無い」

「どういふことですか？」

「これは日本が同性愛に寛大であることを示しているのだ！」

「なんと！」

「同性愛はどの国でも嫌悪されているにも関わらず日本はそんな同性愛を寛大な心で認めている証拠なのだ」

「それが男であつてもですか？」

「女であつてもだ！ その証拠に見ろ！ ちゃんとレズビアンな物も揃っている」

「ほ、本当だ！ 大尉、申し訳ありません！ 私が間違っていました！ 日本はやはり素晴らしい国です！」

「そうだろう、そうだろう。分からない事があればなんでも聞け」

「はい！ お姉様！！」

俺はこのやり取りを聞きながら確信する。ラウラに間違った知識を植え付けているのはこの人だ！ と

「それにしても軍隊で固いイメージがあったけど、結構くだけてるわよねこの人達」鈴はシュバルツェ・ハーゼの人達を見ながら個人の感想を漏らす。これには俺も同感だ。

「確かにな」

俺も同意見の返事をする。すると

「恐らく、ラウラの影響だろうな」

「おわ！　ち、千冬姉いつのま、いて！」

「織斑先生だ馬鹿者」

後ろから急に現れた千冬姉に驚き思わず千冬姉と呼んでしまい恒例の出席簿で叩かれてしまった。

「あ、あの、織斑先生。なんでラウラが関係しているんですか？」

鈴はたじろぎながら千冬姉に理由を聞いてくる。

「ラウラは以前まで誰も寄せ付けない孤高な存在だった。それが今では人との交わりが楽しいと思うようになったということだ、これは最大の変化と言える。いや、進歩と言うべきか」

それは確かにそうだと俺も思う。鈴も同意見のようでウンウンと頷いている。

「ラウラが変わるだけで部隊も変わった。それだけアイツはドイツ部隊にとって大きな存在であると言うことだ」

「なるほどなー」

納得した。ラウラとシュバルツェ・ハーゼの人達を見ていればそれ

は簡単に分かる事だった。

「でもさ千冬姉」

思わず千冬姉と言ってしまったが、俺が言いたいことがあることを察してか、つつこまないでいてくれた。

「変わったのは千冬姉もだろ？」

「むっ」

千冬姉は珍しく目をぱちくりとさせ意表を突かれたような顔になっていた。数秒その顔を維持したあと柔らかい笑みを作り、優しく俺の額をこずいた。

「ばかもの」

照れるように、だが嬉しそうに言うのだった。

午前中秋葉原を遊びまくったシュバルツェ・ハーゼの人は公園で俺達とお昼を食べることになった。俺達は箒やシャル、鈴とセシリアが作って来てくれた弁当を食べることになったのだが、シュバルツェ・ハーゼの人はなぜか【おでん缶】を食べていた。なぜ【おでん缶】なのかと聞くと、

『秋葉原でお昼と言えばおでん缶と決まっています』だそうだ（b
yクラリツサさん）。

筈とシャルの弁当は相変わらずの旨さを誇り、セシリアは相変わらずの不味さを誇っていた。鈴に關してはついにホイコーロまで作れるようになったらしい。味もなかなかだった。

食事も終ったあと俺は一人で木々の下で横になっていた。遠くから『一夏どこだー』とみんなの声が聞こえて来たが今の気持ちいい状態を維持したかったから無視することにした。

（ふー。静かでいいな）

一時の安息に浸っていると近寄って来る足音に気づきそっちの方に身をよじる。

「そちらに居ましたか、一夏さん」

大人の貫禄ある声の持ち主は、紫のレースにガーターベルトが似合う女性、クラリッサさんが俺を見下ろし立っていた。

「て、うわ!」

慌てて紫のレースから視線を外し立ち上がる俺。

「? お顔が赤いですよ、どうかしましたか?」

「い、いえ! なんでも」

（さすがにパンツ見えましたがとは言えないからな）

少し挙動不審になっている俺を心配してくれているクラリッサさんに胸を痛めつつ要件について聞いてみることにした。

「あの、何か御用ですか? クラリッサさん」

「ふふ。クラリッサで構いませんよ一夏さん」

「えっ、と、それはちょっと」

いくらなんでも年上の人に呼び捨てはできない。それに年下の俺にさん付けしているのだから尚更だ。

「そうですか、少し残念な気がします」

「え？」

なんで残念なのだろか聞きたかったが、目を閉じて急に静かになるクラリッサさんに話し掛けづらく、俺もつられて黙ってしまう。

「……………」

「……………う、」

意味が分からない沈黙に耐えきれず苦し紛れの会話をしようとしたときだ。

「あなたには感謝しています。一夏さん」突然クラリッサさんから話したした。

「へ？」

俺はいきなり感謝されてついマヌケな声を出してしまう。

「な、なんの事でしょう？」

「ラウラ隊長の事です」

「ラウラ、ですか？」

俺はラウラに何かをして感謝されるような事をしたか考えてみたが正直心当たりがない。

「あなたと知り合うことで隊長は大きく変わられました。それも良い方向に」

「……そんな事は」

「いいえ！　あります！」

「！？」

「失礼、つい、声を張り上げてしまいました」

「あ、いえ、気にしないで下さい」

「しかし変わられたのは本当です。あの人が織斑教官以外の人に笑顔をさせるなど有り得ない事だと思っていましたから」

これは俺も共感してしまう。最初に会った時のラウラは触れば切れるナイフのような奴だった。初めて会った瞬間平手打ちだったしな。あれは痛かった。

「強さを、織斑教官を目指すために孤高となり、孤独となっていた隊長。そんな隊長にあなたが光となって人と関わる喜びを教えてくださいました」

「そんな大袈裟な」

「あなたはドイツに居た頃の隊長を知らないから大したことではないと言えるのです。あの頃の隊長は、………いえ、よろしゅう。私の口から言うものではありませんでした」

クラリツサさんは悲しい顔を一瞬だした後直ぐに凜とした表情に戻

った。まるでさっきの事は話していなかったかのように。

「とにかく、私は、いえ、違いますね。私達シュバルツェ・ハーゼはあなたに感謝したいのです。ありがとうございます。隊長を変えてくれて」

この時見せたクラリツサさんの表情は、軍人で見せる表情ではなく、年相応の、大人の女性が見せる

「あ」

見とれるほどの、優しい笑みだった。

そして始まりへ

日も夕焼けに変わる頃、今日の秋葉原旅行はこれにて終了となった。シュバルツェ・ハーゼの人達はそれぞれグッズや本やらで両手に大荷物を持っている。その中でもクラリツサさんは誰よりも軍を抜いていて、途中持ちきれなくなったからと現地調達したデッカいリュックサックを購入し、それすらもパンパンになるほど詰め込んでいた。

「今日は私達のワガママにお付き合いしていただきありがとうございました」

クラリツサさんは部隊を代表して俺達に感謝のお辞儀をする。その時パンパンになったリュックが頭の上に移動する。一瞬重さで前に倒れるかと思つたが、クラリツサさんは苦もなくお辞儀から顔を上げた。

「いいえ、お気になさらないで下さい。私達も楽しかったですし、これくらいは」

保護者としてついて来た山田先生は、あわあわしながら答える。

「私達は明日帰国しなければならなかったもので、本当に感謝しています」

「明日帰国するのか？ 急だな」
ラウラが驚いたように聞く。

「はい、本当ならまだ滞在できたのですが、軍の召集がありましたもので」

「……………そうか」

少し寂しそうにするラウラにクラリツサさんは優しい笑みを作ると。

「隊長、私達黒ウサギ部隊は隊長と共にあります。どんなことがあろうと私達は隊長の味方です」

「!」

この言葉にラウラは気づかされた顔をしたあと照れくさい顔に変える。

「あー！ 隊長涙ぐんですね、わかります」

「そんな隊長私は大好きです！」

「可愛いです！」

一気にはやし立てるシュバルツェ・ハーゼの女の子達。

「ば、馬鹿者！ 茶化すんじゃない！ 特別強化訓練をやらせるぞ！」

それを聞いて隊員達は『そんな殺生な』と泣き顔になっていた。特別強化訓練とやらは余程キツイものらしい。

「ふん！ ……………だがまあ、しかしだ」

「？」

「私もだ、私もお前達の味方だ。必ず守って見せる」

威厳を見せようとする顔は、照れと喜びの表情で上書きされたようになってしまっていた。

「『隊長！』『隊長達はラウラの可愛いさに我慢できず10人以上の隊員がラウラに抱きついて行く。その中にクラリツサさんの姿もあった。」

「ば、バカ、離れる！調子に乗るんじゃない！ひゃあ！どさくさに紛れてむ、胸を揉むんじゃない！頬ずりするな！……んっ、そ、そこは………」

囲まれてラウラの姿が見えないが、艶めかしい声が聞こえてくるあたり余程の事をされているのだろつなと悟る。道端でなにをやっているんだろ？この人達は

数分後

「……………」

隊員全員が頭にコブを作りシュンとなっていた。ラウラは、はあはあと息を切らしながらはだけた服を涙目で整えていた。

「あ、あの、まあーなんだ、帰るか？」

「う、うむ。そうしよう」

こうして、俺達の秋葉原旅行は終わりをつけた。

しかし、そうは問屋がおしてくれなかった。

学園に戻ると、事情を聞いた楯無さんが食堂を貸し切り送別会（？）と称した宴会の準備を整えていた。

「せっかくドイツくん dari から来てくれたんだから、別れも楽しくなきゃね」

さすが学園の生徒会長、別れでも女々しくさせない手腕は見事の一言だ。

「私達のためにここまで、恐れ入ります」

「いえいえ、お気になさらず。どんなことも楽しくがこの学園のモットーですから」

初耳だ。

「今日で最後なんだからみんなも思いっきりたのしんでね」

「「「はーい！」「」」

「まったく元気なものだな、こうして見ると軍人も生徒も変わらないと実感するよ」

優希はグラスを握りたわいのない独り言のように呟いた。

「軍人でも中身はやっぱり女の子ってことじゃないか？」

その何気ない独り言に俺は反応し、自然と思ったことを口にする。

「【ひと】夏が女の子の気持ちを語るなんて、異常気象だな」

「なぜ天気予報で喻えるんだよ」

そんなに珍しいことだったか？ まあ、頻繁には言わないけどさ。

「それにしてもお前何飲んでるんだ？ レモンジュースか」

「惜しい。レモンサワーだ」

「酒じゃねーかー！」なんか見たこと無い色だと思ったら、とんでもない奴だ。

「こんなの酒の内に入らないよ」

「酒は酒だろ、俺達未成年だぜ」

「たまには悪い事もしたいじゃないか」

「いや、分からないけど、でもよく酒なんて置いてたな」

「俺が仕込んだ」

「やつぱりお前かー！」

急いで辺りを見渡すと、大きく酔った人はいなかったが、異様に皆テンションが高い。

「酒なんだから飲んだら気づくだろ普通」

「いや無理だろ」

「どうしてだ？」

「少し飲んでみれば分かるよ」

レモンサワーを薦めてくる優希にたじろぎながらも、物は試しと一口飲んでみる。

「む、」

アルコールの強いイメージとは裏腹に、思ったよりアルコールが無いことに驚いた。お酒を飲んでいる感じでは無く、炭酸飲料を飲んでいる感じだ。それでもアルコールに免疫がない奴が飲み続ければ悪酔いしそうだ。

「意外と大したことないだろ」

「まあな、でも飲み続けて良いものじゃないぞコレ」

「そうだな、でも後ろにいる奴は手遅れだけだな」

「え？」

優希の指摘に後ろを振り返ると、そこには目の据わったラウラがダイビングするように宙に浮いていた。

「ラウラ!？」

「よめーーーー!!」

「ぶわっ!」

ラウラを受け止めるも勢いありすぎて椅子から落下する俺、辛うじてラウラを受け止める事だけに成功する。

「嫁よ」

「な、どうしたんだよラウラ!?」

「嫁! 私は早くお前の子供が欲しいのだ、だから受精させるろ」

「るろ? お前自分が何言ってるか分かってんのか!？」

「もちろんだとも、私は貴様を受け入れる準備はすれにきてる」

「お、俺が出来てない」

「あにを〜!」

「だー! 耳たぶ噛むな!」

酔ったラウラは質が悪いらしくガンガン絡んでくる。

「……………一緒になれないのは私が紛い物の命だからか」

「え?」

「……………らんでもない!」

ラウラが何か気になることを言った気がしたが、声が小さくて上手く聞き取れなかった。再度聞こうとしたら

「見つけたわよ! いちくうわ〜」

「うわっ! 鈴、お前もか!？」

今度は鈴がベロンベロンになりながら絡んで来た。

「あんらね、いつつもいつつもセカンドセカンド言ってくれてるける、二番目で嬉しい事じゃないんらからね！」

「は？ 何言つてんだよ？」

「あんたの中のーらんにしなさいて言っれんのー！」

「一覽？」

もう滅茶苦茶だ。優希の酒混入のせいであっちこっちで騒ぎが起きまくってる。異変に気づいた千冬姉と山田先生が場の収集をしている。

そしてこうなった犯人はすぐにわかったらしく、千冬姉に首根っこを掴まれた優希は指導室へと移送されていった。

「はあ〜」

それを見た俺は深い溜め息をしたあと何気なく食堂の入り口の方に目を向けるた、するとそこにはどこか淋しそうに食堂を出て行くウラの姿があった。

『お前は戦っただけの戦闘人形』

深海のような暗い空間に聞こえてくる謎の声。少女はまたあの夢だと悟る。

『お前は造られた偽物の命』

違う

『そんなお前に普通の日常などない』

貴様に何が分かる

『分かるとも』

！

会話が成立し、驚く少女。

そして謎の声は残酷な真実を口にする。

『私はお前なのだから』

な、

『眠れ、永遠に』

「……うう、寒い」シャルロットはあまりの肌寒さに目を覚ます。

（窓でも開いているのかな）

ベランダの方に目を向けると案の定扉が全開にされ風が中へと入ってきていた。

（あれ？）

開いた扉の前に見覚えのある少女が一人立っていることに気づく。それはシャルロットのよく知る少女で同室のラウラであるとすぐ分かった。

「どうしたの？ ラウラ」

扉の前に立つ少女にシャルロットは話し掛ける。すると月に眩くように立っていたラウラはくるりと振り返る。

「！」

シャルロットは驚愕した。なぜならラウラの左目、ヴォーダン・オージェが光輝き、文字のような物が眼球の中をまるで何かをインス

トールするかのように流れていたからだ。そして月夜に照らされた
ラウラの表情に感情は無く、まるで機械のようだった。

「ラ、ラウラ」

突然の異変にシャルロットは不安にかられる。

「――――」

ラウラは機械じみた無言を貫いたあと、ベランダから何の前触れも
無く飛び降りた。

「ラウラ!?」

シャルロットは慌ててベランダへと出て下を見下ろす。

「あれ!?」

そこにラウラの姿は無く、落下した形跡もない。そんなはずはない
と飛び降りた場所をくまなくさがしていると。

ブワァー!

急な突風が吹き寄せた。

「!」

突風と同時にISを展開したラウラがあらわれ月へと向かうように
IS学園を離れて行く。

そしてシャルロットはこの時確かに見たのだ。

満月に浮かび上がるように現れた、ラウラを取り巻く12機のツヴ
アイク（枝）を

シュヴァルツェア・シュテルン（黒い星）

「ISが13機反応があつただと!? どういう事だ!」

織斑千冬は作戦会議室に召集され、現在の状況について聞く。

「わ、分かりません。学園内の情報局から通信があり、突然IS学園から反応があつたとの事です!」

それに先に来ていた山田真耶が答えた。

「所属は!？」

「まだ分かりません。ですが12機はうちの生徒の物ではありません」

千冬はこれを聞いて嫌な予感を感じ取る。なぜなら真耶は12機は学園の生徒の物ではないと言った。

ならば

「……残り一機は、」

「……………ラウラ、……………ボーデビツヒさんです」

「……………」

嫌な予感は的中した。

「織斑先生!」緊迫する会議室に突然シャルロットが息を切らせながら入ってきた。

「勝手に入ってくるな！　ここは関係者以外立ち入り禁止だ」

「ハア、ハア、すみません、でもラウラが！？　ラウラがISを展開してどこかに行ってしまったんです！」

「！　ラウラを見たのか！？」

「はい、あの様子は普通じゃなかったです」

「どういう意味だ」

シャルロットは自分が見た事を話し出した。

「ラウラのヴォーダン・オージェが」

千冬は親指の爪を噛みつつシャルロットの話を聞く。

「はい」

「山田先生、この事をクラリツサには」

「そ、それが、部屋に通信しても出なかったなので他の教員に見に行ってもらったところ、」

「シュヴァルツェ・ハーゼの隊員全員も居なくなっていたと」

「は、はい、その通りですけど、よく分かりましたね」

「数が12機とラウラの1機と聞いた時点で大方予想はできた」

「それで山田先生、今シユヴァルツェ・ハーゼの部隊の様子はどんなっている」

「IS学園から少し離れた離島の上で待機してます。まるで私達を待っているかのようですね」

「なるほど、十中八九誘っているな」

千冬は少しだけ考え更に続ける。

「日本の特殊部隊はどうしている」

「何の動きもありません、こっちから通信もしていますが一向に繋がらないです」

「何者かに妨害されていると思っていいな」

「教師部隊は」

「既に動いていますが、訓練用ISがアクセス拒否され搭乗できないようです。搭乗できるようになるにはまだ時間が掛かります」

「確定だな」

千冬の顔が更に怒りで歪む。

「……仕方ない、専用機持ちを全員呼べ」

「ま、まさか織斑先生！」

真耶ガタリと椅子から立ち上がり千冬の顔見る。

「あいつらに行ってもらおう」

俺は夜中に突然起こされ普段立ち入れない作戦会議室に足を運んでいる。

（緊要要請で、一体なにがおきてるんだ？）

作戦会議室に着き扉を開くと同時に異様な雰囲気を感じ取った。会議室には千冬姉に山田先生、楯無さん、シャル、箒、セシリア、簪、優希がいた。

「一体何があつたんだ？」

俺は先に来ていた箒に状況を聞く。

「私も突然呼ばれたから分からない」

「あれ？ このメンツで何で鈴とラウラがいないんだ？」

「ラウラは知らないが、鈴は饅虫が仕込んだ酒でダウン中だ」

「あつ、なるほど」

俺は納得して、呆れた視線を優希に送った。

「これで全員か？」

千冬姉の重々しい声が聞こえた瞬間周りの雰囲気ガラリと変わる。

「はい、他の専用機持ちは母国でメンテナンス中です」

「……………この異常事態で政府に連絡がつかず、訓練用ISがアクセス不可能、加えて専用機持ちのメンテ、偶然とは思えんな」

「はい？」

「いや、何でもない」

千冬姉はボソボソと呟いたあと俺達に向き直る。

「お前達を呼んだ理由だが、シュヴァルツェ・ハーゼの隊員とラウ・ボーデビツヒがIS学園から失踪し、現在離島上空で待機している。あとラウラが学園を飛び出す所をデュノアが目撃している」それを聞いて俺はシャルの方を見ると黙って頷いた。

「その際ラウラの左目、ヴォーダン・オージエが発動した状態で目の中に文字の羅列が浮き出ていたらしい。どうしてそうなったかは分からない、しかし今は彼女達を一刻も早く連れ戻してほしい」俺達はこれを聞いて呆然としてしまう。だってそうだろう？ あんなに楽しそうにしてたのに、失踪する理由が分からない。

「ラウラとあの人達が！？ そんなバカな」

「事実だ。本来なら政府や教員達で鎮圧したい所だが、通信や訓練機等が現在使えない状態にある。そのため、お前達に行ってもらいたいのだが」

千冬姉は俺達を危険な場所に行かせるのが後ろめたいのか、言葉が少し途切れ途切れだ。

「俺はいいぜ、仲間を放つては置けないからな」

「行きます」

「私も」

「断る理由は無いです」

「……………（コク）」

「生徒会長の私が行かない訳にはいかないでしょう」

俺に続き、シャルやセシリア、箒に簪、楯無さんも同意するなか、一人だけ、参加を辞退する人物がいた。

「オレはお断りします」

優希だった。

「なっ！ 何でだよ！？ ラウラが心配じゃないのか！？」

俺は声を荒げ抗議するが、優希は怯む様子もなく飄々としている。

「そう怒鳴るなよ、血圧が上がるぞ？」

「お前、こんな時にふざけっ！」

更に声を荒げようとすると、千冬姉が左手で俺を静止する。

「強制ではないから参加不参加は自由だが、理由を聞かせてもらえるか？」

「理由、ね。一つはオレのISは学園内以外での使用は許可されていない。独断でISは使用できないんだ」

「それを今優先する時かよ！」

「オレだけじゃない、お前と篠ノ乃【の】はどこにも所属していな

いからいいが、他の奴らは違う、どんな異常事態でも政府や国の許可なく別件でのISの使用は認められていないはずだ」
俺はチラリとシャル達を見ると顔を曇らせ下を向いている。どうやら本当らしい。

「オレ達を鎮圧部隊に行かせるのも恐らく【せん】冬先生の独断のはずだ。さっき言った事を先生が知らないわけじゃないだろうから、よっぽどの決断だったろうな」

「だから何だつてんだよ！ それでもみんなラウラを助けたいと思っ
ているから行くんだろ！？ お前は違うのかよ！！」

「次に2つ目の理由だが、これが重要だ」

俺の声を無視するかのように優希は淡々と話しを続ける。

「オレは死にたくない」

「！」

俺の体がビクリと震えた。

「……………」

優希の目が真っ直ぐと俺を見据えている。まるで「お前は違うのか？」と言っているかのように。

「ラウラやみんなが俺達を殺そうとする訳ないだろ！？」

「本当にそう言い切れるのか？」

「当たり前だ！」

「話を聞くかぎり今ラウラの瞳はヴォーダン・オージエが発動した状態でその目は文字の羅列が流れているそうじゃないか、明らかに正気じゃない」

「だから何だってんだよっ」

「考えられる事は一つ、誰かに操られていると言うこと。そんな人間がオレ達を殺さない保証なんてなにもない」

「……それは」

「相手は軍人、戦闘のプロだ。敵をどうすれば壊せるかを知っている。それを一般生徒がどうこうできるとでも？」

「それでも、……それでもラウラは仲間だ！ 見捨てるなんてできない！」

「【ひと】夏はいい奴だな、とてもいい奴だ。でもね【ひと】夏、オレはいい奴で死にたくない」

「くっ！」

俺は優希を責めることができなかった。他人より自分の命の方が大事なんて考え方は決して間違っているからだ。世界中の人間の大半がこの考え方のはずだ。俺だって死ぬのは怖い、怖い！ だけど俺は

「俺はラウラを助ける」

「オレはラウラを助けない」

こうして、俺と優希の考えは決裂する事となった。

優希を欠いた俺達は今現在、学園を離れラウラ達が待機している離島へと向かっていた。

「それにしてもおかしい事がもう一つあるんだよね」
飛行中、シャルロットがふと話し始めた。

「おかしい事？」

楯無さんはシャルロットの疑問に聞き入ってくる。

「はい。ラウラのシュヴァルツエア・レーゲンとクラリッサさんのシュヴァルツエア・ツバアイの二機は分かるんですけど、残り11機が何かが分からなくて」

「量産型か何かじゃないの？」

「ドイツはまだ量産化は出来ていないはずですよ。二世代型ですらできなかつたんですから」

「ならシャルロットちゃんの国か他の国の量産機かもよ？」

「ならリーダーで確認できたはずですし、それに傭兵ならいざ知らず、国の軍隊が他国の機体を使うとは思えません」

「確かにそうね、でもまあ着けば分かるわ」

「はい」

「楯無さん、シャルロット、見えたぞ」

箒は二人の会話に割り込み目標を発見したことを報告する。

離島上空に並ぶ13機の機体暗くてよく見えない。だがラウラと同じく左目にヴォーダン・オージエを宿すシュヴァルツェ・ハーゼの隊員達の目も黄金に輝き、文字の羅列が浮かび上がっている。いつもならあれは俺にとって綺麗に見えるのだが、今回はやっぱり不気味だ。

しばらく対峙していると、太陽が昇り明るくなって相手の姿が見えるようになってきた。

『あれは!』

すると作戦室にいる千冬姉の驚いた声がオープンチャネルから聞こえる。

「知ってるのか? 千冬姉」

『有り得ない! まさか完成していたのか!?!』

『お、織斑先生?』

「千冬姉?」

俺は恐らく目の前にある機体に驚いているだろう千冬姉に懸念しつつ再度目の前の機体を見る。

ラウラの漆黒のISシュヴァルツェア・レーゲン、クラリツサさんはその姉妹機で灰色の機体、シュヴァルツェア・ツバアイ。そして

残り11機なのだが、灰色と黒で塗装されていて形も一緒で見たことない機体だった。大体ドイツにはISがラウラとクラリッサさんのを合わせて10機で、しかも量産化ができていない状態だ。なのに目の前にあるISは13、シュヴァルツェア・ハーゼが所有するISは3機のはず。どういう事だ。

『【シュヴァルツェア・シュテルン（黒い星）】』
千冬姉が重々しく11機の機体の名を口にした。

「シュヴァルツェア・シュテルン？」

『……………ドイツの、量産型だ』

「ドイツの量産機！？ 完成していたんですか！？」
セシリアもこれに大きく驚く。

『普通に考えれば有り得ない事だ、だが問題はドイツに量産機がある事ではない』

「どういう事ですか？」

『あれは、……………第3世代型の量産機だ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1116v/>

インフィニット・ストラトス EX

2011年11月6日08時18分発行